古史傳

自第百十三段
至第百十七段

廿二

和書門

類	號	函	架	冊
和	二〇二六一	五三	二九	二

內閣文庫

類	號	冊	架	函
和書	二〇二六一	二二	一七	四

內閣文庫

番號	和 20261	
冊數	22（22）	
函號	140	183

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

大阪府立中之島図書館

神代下二也卷

平篤胤謹撰
男 鐵胤
孫 延胤 續攷

浅草文庫

百三十

於是高皇産靈神。更會諸神等。而。當遣葦原中国神。選出時。天思兼神。及諸神等。僉白出。磐裂

根裂神出子。磐筒出男磐筒出
女神出子。經津主神。是將佳。亦
坐天安河出河上出。天石窟神。
名伊都出尾羽張神。是可遣。若
亦非此神則。其神出子。甕速日

神出子。熯速日神出子。武甕槌
出男神。是應遣。且其天尾羽張
神者。逆塞上天安河出水而。塞
道居故。他神者不得行。故別遣
天迦久神而。可問白矣。故爾使

天迦久神(アマノカクノカミヲテ)而。問(トフ)天尾羽張神(アマノヲハバリノカミニ)出(ト)時。天尾羽張神(アマノヲハバリノカミ)答白(マヲサクカシコシ)恐出當仕(コレムツカヘ)奉(マツラ)。雖然(ドモシカレニ)於此道者(コノミチハ)可遣吾子武(ベレトツカハスアガコタケ)甕槌神(ミカヅチノカミヲ)白而(マヲシテ)乃貢進矣(スナハチタテマツリキ)故是經(カレコノフ)津主神(ツヌシノカミ)亦名(マタノミナハ)彌加布都命(カフツノミコト)亦名(マタノミナハ)

比古佐自布都命(ヒコサジフツノミコト)。此者矢作連(ハヤハギノムラジ)出祖也(ガオヤナリツギニタケミカヅチノヲノカミ)。次武甕槌出男神(ヒ)。亦云(マタノヲヲス)健雷(タケイカヅチノ)神(カミト)。亦名謂(マタノミナハヽヲスタケフツノカミト)健布都神(ヒ)。亦名謂(マタノミナハヽヲストヨ)豐布都神(フツノカミト)。

磐裂根裂神(イハサクネサクノ)ハ。伊邪那岐大神。其妹伊邪那美命(ヨミ)也。豫美都(ヨミ)国ヨ神(カム)避坐(サリマセ)るおやの本ヒ。火産靈迦具土(ホムスビカグツチ)神の生坐(アレマセ)るを

ア起れる事を御怒まして。御佩せる伊都之尾羽張の御刀を拔して。火神を斬給ひし時よ。其血。天よ激上アて。安河原の五百箇石村と化アぎ。其御刀の鋒をゆ垂落る血。それ石村よ激越き。石村を御刀と化れ神靈ふ因て成坐る神ふ。主と石村の神靈よ因て成坐る故よ。其子磐筒之男。磐筒之女神も。共ふ磐てふ御名を負給ふ。ふと。既ゆ委く註ア。(ちて其石村を。やゞて火神の神靈れ擬て化れるあり。此等れふと。奏くを第十五段れ傳を見て知べし。○經津主神。御名の義下ふ註ふぢし。○將佳を。延祁牟と訓ぢし。第六段然善れ処ゆ既よ云るを見べし。○天石窟よを。石屋と作り。今を書紀よ據まり。)おは天安河之河上れと有まで。彼石村を疊みて造せる石窟あるゆ。はと固をゆ彼河上よ在りゆる自然の石窟よても有ぢし。(師を總て石屋とあるをで。大御神の幽居る石屋をはじめ。堅固を称て云アと。解れおまれみを。寂れ石室ありを說れども。是とり。)○伊都之尾羽張神を。伊邪那岐大神の火神を斬給ひし。彼御刀れ神靈の現はれ給ふる御名よて。即彼御刀れ名を天之尾羽張とも。伊都之尾羽張とも云をし上よ見えて。御名れ義も其處よ註へア。(第十五段の傳見べし。)亦名を稜威之雄走神と云申せア。○若亦非此神則。今世れ語よも。如此言こを多し。○甕速日神を。此も彼伊都之尾羽張の御刀れ譚をア垂落る血。まと彼磐村よ激越き。其磐村と御刀をの神靈よ因て成坐

ふ神ふ已。此事も既ふ第十五段ふ見えたり。然るふ此ふ。伊都之尾羽張神れ子と云るは。主を御刀れ神靈ゝ因て成坐をバれ已。然ま

む此ふ准へて。磐裂根裂神の。主と磐村ふ因て成坐せることをも。思ひ辨ふべし。ちて此神の御名の義。まと熾速日神の御名れ義も。既ふ註ふめ。第十五段れ傳見るべし。凡て此段れ。彼段とをく引合せて読辨ふべれ。其妙ある由縁れ知りがとうらむ物ぞ。○武甕槌之男神。御名の義下ふ云ばし。○且字ハ。麻豆と訓ばし。武甕槌神れ事を云へる續ふるふ。立復已て。上の尾羽張神れ事を云處ふる故ふ。麻豆と云てをく當ま已。○逆塞上とは。師説ふ川水を塞留湛へる。側の方ふ引遣をいふ。其れ下ふ流ふゝ水を。横ふ引遣る故ふ。逆とも上を云云れ已。

故ふ邪と云を逆と云と。同意ふあるふれふ。必しも上ふ回ふ非ず。万葉八ふ。佐保河之水乎塞上而殖之田乎。とふ見ふも同じ。さて世ふ物ふ水を。ふゝ。其中ふ砥を安て。刀剱を磨ぐれ。此神のかく河水を塞湛へて。石室ふ坐せるふ縁れり。此石屋れ。宗れ石れ屋ふりと云ること。思ひ合へべし。をあるれ。信然ことふて。彼火産靈迦具土神れ血の化まふ磐村ふふ河上ふしも。如此して住給へること。御稜威を練て。そを震ふばき時の至ふを待給ふ趣ふ想像ふゝれ。決て幽契ふる事れるばし。ふことや。国生坐る伊邪那岐大神の。大正統と坐ふ。皇美麻命の天降坐て。此国知看ふ時しも。経津主神武甕槌神れ。荒振邪鬼等を討罰め給へるこをれ。伊邪那岐大神の御稜威。まと迦具土神れ御稜威も。此時ふ至りて顕ふゝ道理をも。をく味ひて悟るばし。ちて如此塞留ふて住給ふ石窟を。

香嶋宮と稱へ𪜈。其は下より引く常陸風土記に見えと𪜈。○塞道をせた。彼塞留とる。水を引て。道路を絶をいふ。○居故た。袁禮婆と訓ぜし。かく訓て。故字の意をおもきり。○別をた。他神をかゝて得行まじ𪜈故に。彼處に住給ふ神に。殊に由緒ある神をと云意に𪜈。○天迦久神。舊事紀に天迦具神と作𪜈。名義。師說に。万葉十三に。劔刀鞘從拔出而伊香胡山を𪜈ゝけ詠るた。刀を鞘をり拔出して擊。とおゝけとる意ある。を思ふに。今此劔神。尾羽張神。建御雷神を。いぢあひ起せる功を以て。劔を拔出て擊こゝろに称さる名なやと言きおきど然に非ず。此た天迦久弓。天迦久矢を。はと鹿兒弓鹿兒矢とも云て。迦久とは鹿の事ふに就て思ふに。此神は鹿神ある。ぜし。鹿を和名抄に。和名加とあれど。本た香山の迦具と同語ふて。迦久ある。を。

加とのみ云た。久を畧る名ふべし。ちて加碁とも云は。香山を香語山とも云ゞ如し。兒の義ゝは非ず。はと志加とも云た。や〳〵後れ語を聞えとり。其たまおの迦具土神れ御骸。天に上りて香山を化れるに。大山津見神成坐し。はと正鹿山津見神と云も成きふた。決く鹿神ある。こと。上に云へる如くふに。第十六段の傳ふ云へるを見よ。石屋戸段に。彼香山の鹿を捕て。太兆に用ときた。彼山に鹿れ住ること。炳し。其やゞて正鹿山津見神の末ある。ぜし。ちて香山と云名た。迦具土神れ御名に因て負せ。其山の神れ末ある故に。鹿を迦具と云ふらむ。ちて常陸風土記に。鹿嶋神れおを。香嶋天之大神。天則號曰香嶋宮。地則名豐香嶋宮と記せり。第百二十九段に注ふを見よ。香嶋天之大神とは。建御雷神を申せ𪜈。然れど彼住坐る石窟の

處を香嶋と稱するなと灼く。此國ある宮地を香嶋と云も。其名を移せる由あり。ぱと此を鹿嶋とも書とまぢ。鹿の住む嶋と云意あるなぞ論ずし。香島ぞ云書るよ依て。鹿島と書るなも。加具島と云ふべきこと炳し。其て此神御親子ともよ。鹿を愛寵み給ふ幽紀契れ有ずらむ。試よ言はゞ。此神とち。火之迦具土神よ由緣のまぢ。鹿て彼神の御末れ流ある故よ。愛しみ給ふよぞ有べき。常陸れ鹿島て更あり。大和の春日山。其餘も。武甕槌神れ鎮坐ぞ処よは。鹿れ多ゝ係も。此ゐ由ること。かく考究集ゑて。此時別ゐ選びて遣せ係。天迦久神ぞ云は。決ゑて鹿神ある。と思ひ定と係ある。石屋戸段ゐ。天思兼神の思慮りて。香山の鹿を捕へ為係を思ふよ。此時れ御使て。迦久神こそと思慮れるも。まと思兼神ある。ぞゝむ事ハ云も更あり。是まと香山よ住給ひて。鹿よ由緒ある神ある。ことて。既よ第五十段れ傳ゐ委く云るを見ばし。ある末よ云をも合せ考ふぢし。第百二十九段。香島宮の処見るべし。

○問とは。葦原中國言向よ罷れ。とある大詔をれぢて。仕奉むや否ぞ問ある。○恐之ハ。師云加志許志と訓べし。如此言て。即仰を承り諾ふ辭よあるあり。今世よ。加志許麻理白多と云も。是をり出ある。此言上よも。此次ゐもある。○當仕奉ハ。都加閉麻都良牟と訓こぞある。雄略天皇卷。推古天皇卷ゐぞの哥よも。都加閉麻都羅牟とあり。師云。此言古書よ數知らぢ多し。上と係人り事係ぞぢゐて。万の事ゐ云ある。都加閉ハ被使よて。波禮て閉と切まる。君よ使はれ奉係外り。然れむ使と事ぞ。漢字て異あきども。下を使と上よ被使と云ざまのかれるれみりて。言れ本て一ッあり。ちて都加閉奉を。中昔ぞ。ハ。都加宇奉と云。まと其宇を牟よ轉して。都加牟奉と云。まと其牟を

暑きて、都加麻都留と云へり。かく言の轉れるのみあらば、其意も漸にうすきて、今は都加麻都留と、都加閉麻都留とは、甚く異なりて、同言と聞えぬべき如くあれども。○此道とは、師云葦原中国言向より行事を云。凡て物を行く事を指て道と云へるこゝ。万葉六に、天平四年、天皇賜酒節度使卿等御歌に、丈夫之去云道曾と詔ひ、中昔はゞでも古今集に、人遣の道あらぬくよゝを云へるなぐれ。歌に多詞も多の也。漢文に、此行、行字は行といふなどは、崇神天皇巻、東方十二道とある下、考合せ出し。

○可遣吾子武甕槌神。此は師言れ如く、伊都之尾羽張神みずからは物せぬ。此神をしも遣して、速けく功の立ぬき深理ぞ有りけ。試に言はゞ、稚産霊神は功德は、其御子豊宇氣毘賣神より成り、津速産霊神より興台産霊神までの功德は、兒屋命より至りて成れる如く、尾羽張神、甕速日神、熯速日神と次々に、其功德調ひて、武甕槌神より至りて、其功の成れる由あるべし。知ぬらば、経津主神も、磐裂根裂神、磐筒之男、磐筒之女神と次々に、功德の成整ひ、其事も是に准へて悟るべし。○貢進とは、此武甕槌神を、大御神の御許より奉遣ぬ。○偖さて論ふべき事あり。其は師説に、古事記に、経津主神と云神あれを、書紀に、経津主と武甕槌とを別神と爲とは、甚異なる傳なり。其は成坐る處は更なり。天に此国言向より天降し給ふ所にも、経津主を武甕槌と二柱を云へり。遷却崇神詞も書紀に同じ。古事記は天降し所にも、建御雷一柱を云て、別に経津主てふ神は、其は建御雷の亦名を、健布都とも豊布

都とも有れど。彼經津主も。此亦名ありと著し。ふ。其證を云むりハ。彼紀神武天皇卷高倉下れ夢よ。天照大神謂武甕雷神曰云く。時武甕雷神登謂高倉下曰予劔號曰師靈云くとあり。若彼神代卷の如く。武甕雷と經津主と別神ならば。此夢よも二柱共よ見え給ふべきよ。然もならば。其上此劔の名をしめ。師靈と云ふ。決く經津主神れ劔ゐるべきよ。其神おそ。此夢よハ見え給ふべきふ。然れならば。武甕雷れ予劔として授給へふれ。此神やゞて經津主ふふ故ならばや。如此書紀ハ。神代卷と神武卷と相合は。神武卷れ。古事記の趣と合へり。まと出雲國造ゞ神賀詞よれ。天夷鳥命爾布都怒志命乎副天降遣天とのりて。建御雷の見えぬも。一神ふれど形るべしと有り。此れ信よ然る說りれ有れど。常陸風土說よも。普都大神。巡行葦原中國和平山河荒梗之類云く。とれ見えれど。健御雷神れ見え。猶熟考ふふ。此れ二柱よして一柱の如く。一柱ろと思ふふ。其御祖も。石村と御刀を詳よ別りて。正しく二柱成坐るゞ。其差れ髣髴ふきれ。或は一柱と坐まし。或は分りて二柱とも爲給ふよて。幽き妙ある所以ある事とぞ思れふ。卓れて貴き神等ふ。正しく二柱ふるゞ。一柱を坐まに類れと多くありて。上よ往く其由を論ずりき。師れ古事記の傳をのみ称て。書紀を言腐されれ。古事記よ。彼成坐れ所よ。石拆根拆神を始め。八柱の神名出されれど。多く次次とれと有て。建御雷神も。直ふ其時よ成坐る趣ふるれぞ。いを物げふく。餘の神等れ成坐る由緒も。其功德のふ

ども詳ならぬも、彼記も彼処も、甚漫れる傳りぞ有ける。あを末よも次く註ふを見ふべし。○經津主神。御名の義かれ師靈の御劔よ依れ已。其も上よ師の引れさる。神武天皇紀よ。師靈とふる處ふ。此云赴屠能瀰哆磨とあるよ就て。師說ふ。師字は。廣韻玉篇ふどよ。斷聲と注せふ意を以る書れしよや。今云。常陸風土記よ。建借間命の荒賊を滅せる処ふ。臨斬所言今謂布都奈之郷と云る臨斬字ハ。郷名よ依るふ。布都奈と訓むう。さもあらバ此よ由ふりげあ已。今世の言ふも。物の殘ふく清く斷き離る貌ふを布都といふ已。布都理ふど云り。狹衣よ。ふれと見れども有已。○今云。少毘古那神の依來坐る処よ。都不見物とふる都も同じ。まさ俗よ。ふれ〳〵と見限る。ふれよ否ふぞ云も。同意ふる法し。但し天照大御神の神鏡を。眞經津鏡と名申れふとも。何ふる由とも未考へ得ぬ。や言れさふよ依れど。彼劔の利ふて。物を清く斷離れる意を以て稱ふる御名ふり。弥加布都。比古佐自布都。健布都豊布都ふどれ布都みふ一ふり。ちて主とは。此劔れ主さふ由ふるべし。是ぞ信よ師說のごとく。經津主。武甕槌。一神れる一。證ふりゝる。さて大国主神の御子よ。若布都主命といふ神名も。此經津主神の国巡給ふ時ふ。彼神れ從ひ巡り給へる謂ふどよ。○彌加布都命。比古佐自布都命。御名れ義。布都ハ上了同じ。彌加ち甕速日武甕槌の彌加よ同じ。下よ云を見法し。比古佐自れ佐自ち。記傳よも未思得ぬと有ぬど。刺の義ふや。下よ引く古事記ふ。佐士と有て。自士ともふ濁音む拘法らば。孝靈天皇の御子よ。日子刺肩別命と云も。ふり。まさ式よ。阿波国名方郡。天佐自能和氣神社。隱岐国知夫郡よ。天佐志比古命神社。ふどあり。是佐志の例ふり。ちて古事記神武天皇段。布

都御魂刀は處よ。此刀名云佐士布都神亦名云甕布都神
とあり。然きば御刀の名をやがて神名と爲ることあり
け。あゐ下よ註ふ見るべし。○矢作連之祖也。矢作は夜波伎と訓べ
し。姓氏錄河内國雜姓よ。矢作連布都努志乃命之後也と
有り。此氏人のおや。稱德天皇紀よ。寶龜元年四月癸卯。正
八位矢作造辛國賜姓宿禰。未經歲月皆復本姓とあり。河
内國人と聞えとり。姓氏錄は是をり後よ撰さる錄あ神
名式よ。河内國若江郡よ。矢作神社あり。此氏人は祝部ふ
經津主神社あるべし。河内志よ在八尾宮邑矢作械樋西
北有長久年中國宣今稱八幡と見
とり。清和天皇紀貞觀二年七月は下ふ。進河内國從三位彌

加布都命神。比古佐自布都命神階竝加從二位とあるは。
決く此社の神ふり。前よ徵りハ一本よ依て從二位を正
三位とせるは誤あり。後よをく考へ
て改め。然るは此御名は社式り河内國ふは見ざまども。當
昔從二位を授奉給ふ。ぞかりの神は。官帳よ載ぢふ。
は有まじゝれぞふり。師說よ若くは枚岡四座の内よや
有む。とあまど然らば其は第四十
九段傳弓削連の下を見て知べし。まと若江郡弓削神社
を今布都大明神と云ふまども。彼社は河内國弓削氏祖
天日鷲翔矢命ふるべき事も第四
十九段の傳よ委く註べるを見べし。はと式り。壹岐嶋壹岐
郡よ。佐肆布都神社と云ふ二社ふり。一社ハ新城村と云
村と云よあり。一社は箱崎
と或書ふ云ふり。まふ石田郡よ。物部布都神社と云もあり。
此も物部村といふよ。
今ふ在と或書ふ云ふり。○武甕槌之雄神。亦云健雷神
古事記ふ。

建御雷之男神とゐの卍。之雄は、古事記の之男は效ひて、武甕槌之雄と書き、紀は字用格ふ效ひて、武甕槌と書き。師云。甕槌御雷とも借字よて。美迦は伊迦ふ通ふ言ふ卍。それ伊迦は。嚴示。舒明天皇紀ふ。此云伊箇之保虛とあり。重日極天皇紀ふ。此云伊柯之比。伊賀志御世。祝詞。まと伊迦米志。伊迦志ふどれ伊迦ふり。源氏葵巻ふ。とけくいうれひとぶる心いでき。て。又手習巻ふ。いのきさ万を。人ふ見せむと思ひてれどゐの卍。それ美迦と通ふ例は。遷却崇神祝詞ふ。卽此神を。健雷命とゐの卍。美迦豆知。伊迦豆知通ふ故ふり。まと嚴きを美迦と云ふ例は。仁德天皇紀歌ふ。瀰箇始報は。速待と云む枕詞よて。嚴しき淖の速きと云意は。おく〳〵けふ卍。三日淖の說ひ謂ゆふ天津甕星も嚴きを云。惡神と云ひ。先誅と云へる。よて。嚴きこと知らる。甕栗も嚴栗ふ卍。上の甕速日其外も。神まと人名ふ甕と云は。皆此意と知べし。都知は。上の野椎神は下ふ云るゞ如し。雷字ふ付て。意を思ふ。ひとゞ。○健布都神。豐布都神。健豐とも。稱言ふ卍。布都の義上ふ同じ。神名式ふ。阿波國阿波郡。建布都神社あ卍。當國の神社考ふ。郡村と云り在と云ふ卍。

於是其天穗日命者。押別天出八重雲而。天翔國翔而。見迴天

下而返事白出豐葦原出水穗
国者畫者如狹蠅水沸夜者如
火瓮光神在石根木根立青水
沫示言問而荒振国也雖然鎮
平而於皇美麻命爲安国平然

將令所知坐白而以己命出子
天夷鳥命示云天ノ副經津主神
健御雷出男神而天降遣而撥
平荒振神等国作出大神示媚
鎮而大八島国現事顯事令事

避矣。

此段は。出雲神賀詞を採て文を成せるゞ。其發端を於是其と記起せるは。上ゝ遣天穂日命則乃媚附大國主神而。至三年不復奏矣と有を承と。其は記傳ゝ。此天穂日命は故事を考ふるゝ。古事記書紀崇神祝詞とは。大旨同く返事奏ちゝ。ゝ趣ゝ。神賀詞のみは。其趣甚異ゝ。此事書紀の註者とちの論ゝきは何ぞや。彼神賀ばゝり。は古文をゝ等閑ゝれみ見過されしいと恨し。師は祝詞考ゝ云。穂日命は。大名持神ゝ媚附て。三年ゝ至まで復命申さゞと。古事記書紀ゝぎゝは有を。此神賀詞ゝ如此云ゝ。出雲國造ゞ遠祖れる故ゝ。宜く云ゝせるゝやと思ふ人も有ゝむゝ。然ゝは非ず。右は二記ゝ漏とゝ傳事の。此詞ゝ遺れる。若二記ゝ見ゝゝ如く。終ゝ返事申さゞは。天若日子ゝ亞とゝ罪も有べきゝ。然は。天ら天神祖の詔ゝ。大名持命は祭を爲は。穂日命と詔ひしは。をく彼神を媚和せし故ゝ。今云。此の大詔命のことは。第百十六段ゝ見えたり。けて天ゝ復命して。終ゝ天夷鳥命。布都怒志命を天降して。大ゝる功を成るゝ。もは天穂日命は思兼ゝを。れ。と言れゝは。ぞ。委は考へゝれゝは。今はと委く考ゝる。先初ゝ此神ゝ天降し遣ゝは。次の天稚日子の如き。征

伐の御使よれ非ざて。神賀詞よ云へる如く。多〻此国れ體を見て。其狀ゐ隨ひ多。宜さはり謀はし米むとゐぞ有〻むこのし。其故れ。彼天若日子を遣れち〻ゐれ。弓矢ゐぞ賜ひし事ゐるを。此神よれ然事も無きぞゐ。若征伐ゐらバ。最初よ此神を遣ゐ所よぞ。弓矢ゐどの事れ有べきぞゐる。偖ま之建御雷神を降し給ふ処よも。弓矢ゐどれちどれきれ。其れ既よ天若日子れ処ゐ出ゐまぞ。暑〻ること。もをとり然有べきゐ。ちて復奏多ゐひしは。三年も過て後の事れ。まぞ。古事記ゐどゐれ。其間甚久ちく還給れぬゐどを言て。三年よ至まで待とゐ。還り來坐ぬ故よ。終ゐ返事申さで止ぬる者のごを思れ奉ゐしゐり。三年過るまでも。此国よ坐しゐまぞ。はやく其ゐどよも媚附てかゐ。ゐ和し給ひ〻むる故よ。媚附てとれ云へる。れゐ。それ未返事せぬゐどれ。其志趣知られざきバ。多〻不忠ゐごとぞ聞

えゝむ。天若日子の事を云ゐる処よ。此神示不忠誠也とある。亦字れ。先れ穂日命を不忠誠として云へるゐり。即次の天若日子の事よ移れる故ゐ。其後よ此穂日命の復奏し給ひし事をぞ。紛ゐのして傳ゐ脱せるれゐ。然後よ雉名鳴女を遣ゐ時ゐ。多〻天若日子れ事を問ちむる由のみ有て。此穂日命のゐ久しく還らぬ所以を。問ちむゐ事は見えぢるを思ゐぞ。其以前よ。既ゐ返事申給ひしゐを知れとゐ。と有ゐ。今此説ゐとりて。神賀詞の傳を採て。此り挙ゐるゐり。○押別天之八重雲而れ。皇美麻命御天降れ處よ。排分天之八重多那雲而。稜威之道別道別而とゐゐ如し。其は天磐船よ乘發しゝむ事れ云も更ゐり。れゐ彼處よ云を見

ばし。第百三十七段の傳見るべし。○天翔国翔て。古語の文りて。神武天皇卷よ。饒速日命乘天磐船而翔行大虛云〻と有るよ同じ。○天下は阿米能志多と訓て。高天原よ對へて。此国土をいふ古言あるおと既よいへり。況て此て上ふ天之八重雲を押別て天翔ゆを云て。かく天下を見廻と云ふれば。本をりの古言ふ所こと。殊ふ明あり。なお第九十段天下の処を見るべし。○見廻とは。国體を見行し廻り給ひ。專とて大国主神の狀を見。まと凡て荒び猛ぶ諸神の狀をも見て。言向け服ふ者おろしや否を伺ひ給ふを云。大国主神ふ媚附て。和し給へる功て。即是よて。此間三年ばかりを經おること。上ふ見と侮ふ如し。○返事白久おの返事白し給ふ所て。雖れ頓使有りゝるを以前ふるばきおと。上よ師れ言ゆふ如し。然ゆと事のてことびれ。然て記し。ぐとくて。此よ記し続とるあり。○狹蠅のこゆハ既よ出と。第四十三段の傳見るべし。○水沸ハ。師云美那和伎と訓べし。水は借字よて皆沸ふ。古事記よ。惡神之音如狹蠅皆沸。万物之妖悉發。と有るよて知ばし。○火瓮光神。石根木根立みふ上ふ出と。第百六段の傳見るべし。○青水沫て。師云水沫ハ美那和と訓べし。水之阿和れ。乃阿の約ふ那ふきぞれ。○雖然鎭平而云〻と白給ふ所て。三年ばかりよ。大国主神を媚和して。重祐て天とり御使者ならむ時

は。詔命を諾ひ給ふばかく約ひ置給へる故あひ。然らでは如此る御言の有べくも非ず。然れど次よ。大国主神の。速ふ諾と白給ふるた。加茂翁言れ如く。もはら天穂日命れ思兼よぞ依きめ〻ふ。○皇美麻命。おた邇〻藝命を指て白せふ。ふ非ず。天照大御神の天日嗣知看ゝ御子。天忍穂耳命を白給へひ。其は此時いまど邇〻藝命の生坐さぬ頃ありるを以て知ばし。是をもて皇美麻命と申ゝ御称た。天忍穂耳命をり次く。大御神れ天日嗣を知看ゝ天皇命の大御称よて。美麻とた御孫の義よ非ばといふ。予ゞ説れ空らざる事をも辨ふべし。

○天夷鳥命。名義上よ註せひ。第三十八段の傳見るべし。神賀詞りた。天夷鳥命爾。布都怒志命乎副天とあふを。古事記よは。天鳥船神。副建御雷神。而と有ひ。是をもて。彼此同神ある事を知べき由た。既よ徵ふ委く云ふひき。鳥船と云名の義ハ下よ云ばし。第百十六段の傳見るべし。ちて二柱神よ。此神を副て。天降し遣せる事た此神も前よ。天穂日命の返事遲きを見ると。天降し遣せふ時ふ。順其父之事而返言申さぬと有れど。父神と共〻よ媚附て。事を謀ひ給へるこを知ばし。故己命よ代て副遣せふふり。

○撥平荒振神等ハ。經津主神。建御雷神二柱の功れり。然るを此よ穂日命の功よ係とひと聞もるた。上よ云如く。はお初ふ媚和せる功れ大ふきだれひ。○国作之大神と。は。大国主神を申せひ。出雲風土記よ。かく申せること數多見とり。○媚靜而た。

媚和せる亡元をゆゑ。靜とは。彼大神也。終に杵築大社に鎭坐せゐまでを係ゐい矛ゆ。其を下文ゐ。令事避矣と云るもて知べし。○大八嶋国。現事顯事云〻。前に大八島国之と文を成せるは誤ありゐ。現事ハ師言の如く。宇都志許登と訓み。顯事は。阿羅波許登と訓べし。猶下にも同意ある事をかく狀云べし。ゐ。二ゐ重ゐて云は。古文れ常ゐ。然るを祝詞考に。現と顯とを分て解れとる也。師も云れとる如く強言あり。ちて大国主神の。大八嶋国を造固ゑて大国主と爲賜ひ。青人草を治ゑ御坐せる現事ハ更ゐゆ。大八嶋国をさ矛に。皇美麻命に。事避しめ奉ゐ給へる由ゐゐ。それ避奉ゐ給へゐ趣ハ。次の條〻に見えと依ゐ。

を。

於是經津主神。健御雷出男神。降到出雲国伊多佐出小汀。而拔十掬劍。伊邪佐出小濱。而拔十掬劍。云伊佐出小汀。而逆刺立退穗而。趺坐其劍前

而問其大國主神曰高皇産靈
神出命以而問使出汝宇志波
祁流葦原中国者我御子所知
国也言依賜也故先遣吾二神
而令駈平汝意何如當避奉不
乎問出時大国主神對白出疑
出汝二神者非來吾處故不須
許唯吾住所者如天神御子出
天津日繼所知出登陀琉天出
御巣而於底津石根宮柱太知

於高天原。冰木高知而。治賜則。
（ニタカマノハラヒギタカシリテヲサメタマハバ）
吾於百不足八十坰手隱而。侍
（アハニモタラズヤソクマデカクリテサモラヒ）
焉白給矣。
（ナムトマヲシタマヒキ）

伊多佐之小汀。示云。伊那佐之小濱。示云。伊佐之小汀。古事記ハ伊那佐。書紀ハ伊多佐。但し字ハ五十田狹と書れとり。まと大名牟遲神の。少毘古那神ハ逢給ひし處ハ。伊佐とあり。但し字ハ五十狹と書とり。凡て書紀ハ。伊を云ハ。五十と書れとまど。面白ゝら弘ゞ余ハ從ひ。同處ハ。多を佐と那とハ。常ハ通ふ音ハ。神名式ハ。出雲國出雲郡ハ。因佐神社あり。其處ハ。風土記ハ。伊奈佐之濱云処ハ。此辺の浦を。俗ハ。いなさ濱と云を。杵築大社記ハ。国司帥中納言藤原家任日記を云を引て。天仁二年七月四日。大木寄稲佐浦と。神武天皇巻哥ハ。伊那佐の山ハ大和ハ。まと遠江国ハも。引佐郡あり。哥ハ。いなさ細江と。ハ見ハ。此等皆同名ハ。此ハ決ハ。稲背脛命を。此時の謂ハ。依て祭ると。ハ。示現ありし故事を記せハ。此神ハ。其時ハ。稲佐神の。ハ第百二十三段の傳ハ。委く記ハ。を見ハ。師云。伊那佐ハ諾否ハ意ハ。大国主神の。諾否ハ答を問賜ひし處ハ。ハ。貧る名ハ。や有む。仁賢天皇紀ハ。諾。字を勢と訓。放されば云ゝとよめり。万葉十六ハ。否藻諾藻とを。ハ。諾。字も。勢とも訓ハ。ハ。字と訓ハ。ハ。今世ハ。も。字と云

ふ同おくて。称唯といふ乎、
ふ同じ。乎と宇を通音あり。式ふ同郡ゝ杵築大社の次
ふ。同社大穴持伊那西波伎神社と云あり。ぱゝ天比奈等
理神社も同郡ふ所ゐ。和加布都努志神社と云もゐまゝ。
此神ゝ大国主神の御子ふて。此の
経津主神ふ小汀とは。凡て小川小田小野あゞも云ふは。
ゐあらば。
万葉ふ。難波の小江おぎも詠て。必小さゝら波ぎ也云。小
初瀬。小筑波おぎゝ類。こゝ稱辭の如し。其は本ゝ細小き
を云言おるゞ。稱辭とゆあまゐ所おゐ。大と云て。称美る方
大ろゝれど。不好方ふも外る如く。小ゆ不好方ふもあり。
まゝ事ふをりて。称美る方ふもあるゝ。細小き由を云
て。物を称ることゝ。
今世ふも多し。
ちて此時ゝ大国主神ゝかの宇迦山の
山本の宮ふ。住坐るおゞとふや有々む。宇迦と伊那佐と同

郡おゐ。彼宮のことゝ。第八十六段ふ見えとり。○降到ゝ久陀理都伎と訓べし。○浪穂ゝ上ふ出ゐ。第八十九段の傳見べし。○逆刺立ぎは。劔ゝ鋒を以て刺もゝおゐふ。是い柄ゝ方を刺立る故ふ。逆と云。○劔前ハ。師云鋒おゐ。上ふも御刀前おゞ所ゐ。延佳本ふ。前ふ。ゝと訓るゝ。いみじき非おゐ。おゝ劔鋒ふ跌坐む。ゝ甚所ゐるほしき事おり。と思へるからの強事おり。凡て近世の人ゝ。漢籍ふ辺ゝ。さゝしら心ゝ。みおかくの如し。書紀ふゝ。踞其鋒端と所ゐ。是をさ宇ふ白井氏おゞ。其前ふ踞る由ふ註しゝ。るゝいゝふぞや。ちて鋒宇ゝ何の用ぞ。いと可笑くふ。

○跌坐は。師云阿具美章氏と訓べし。宇知阿具美と。打てふ言を添るもゝ。志理宇多牙と訓るゝ叶ゝ。但し書紀ゝ踞宇ゝ。阿具美章と訓ゝ宇ふ所ゐらば。踞ハ志理宇多牙おり。志理宇多牙ゝハ。尻打挙ふて。跖を地ふ著て。膝を立て。臑を浮挙て坐をも云べゝ。ゝまゝ。古書ふ腰を懸るゝとふ云

卍。然れど書紀は。踞其鋒端とあるは。劍鋒は腰を懸坐を云ふて。古事記は。趺坐をあふとは異あり。神代紀海神宮段は。寛坐とあるをも然訓卍。阿具美は。足を結俗は丈六かくと云坐樣あり。此は丈六の佛像をり出さる詞あはべし。又是を予が鄉の方言は。阿具良加久とも。阿受久美加久とも云り。阿受久美い。足組ふて。阿具美はたあじ。趺字は佛書は也。結跏趺坐あど常は云て。阿具美ふをく當れ卍。ちて此阿具美居ふ二ッあ卍。組とは足れ末を膝下は敷と。股上弓舉て。跖を仰れて組とあ卍。まと膝を脇へ張りて。左右の足掌を合せても坐る。此も趺の類あり。ちて今此神の如此爲と万ふは。皆天神は御使は。絶れて奇く。靈き威德あるを表示せるあ卍。今云此。処古事記は。て。鳥船神と建御雷神と二柱かく爲給へる趣あり。然るは鳥船神。やがて夷鳥命は。大國主神を媚和せはは神あるは。如此るとげは有べくも非ず。此をもても書紀は。經津主神。武甕槌神二神をあるり勝て聞も はを思ふべし。○其大國主神とは。師云只り此神の御名

殘指て云とは。少り異はして。其國の主とは神と云意は云るは卍。上は須佐之男大神は詔は。爲大國主神を詔弓はも同じ。第八十六段の傳見べし。然れど其を云はも。ゑゞ此神を指は非ず。其國之と云意あ卍。然らざれど。此其てふ言上は承る処いと物遠し。ちて其國とは。天をり降坐る時は處あれど。凡て葦原中國を指あ卍。次の詞は。て然聞も。○高皇產靈神之命以而。古事記は。此は天照大御神。高木神之命以とあるは誤あ卍。高木神とは。郎高皇產靈神あり。其を汝宇志波祁流を云をり。言依賜也を云まで卍文は。心を著て視ゑし。初は天照大御神の御詔は。豐

葦原水穂国は我御子は可知国也と御言依賜へる詔命を承て全高皇産霊神の問賜へる御言あはなや故今は神代紀正書に高皇産霊神とはみ有ふ依れ已但しかく言はゝ此は天神の御威勢を知しむる処あまぞ大御神の御名はなるぞ威勢なりて聞えむ云人も有あむゝ然はは非ぞ凡ていと高く尊きをぞ奥は称へて其御言を承て御前の事独る人の使者は言せさらむりは殊は其奥あはは貴人は高く尊く恐まるゝとばあり其は譬へば大臣あらむ人の使者は天皇命の御心ぞ御言ぞと言しめとるは此をあく尊く聞もはをも思合ぞばし○問使之は師云登比爾都加波世理と訓べし漢籍讀ふはみ耳外まを知る心ふは如是讀むをば何ぞゝやちぞけあ知ゞ如く思ふ人も有ゑれど御国語は上代も中昔も今世ゑかく云ぞ定格あはさて古事記は

は遣はは使字を通はし書る例上はもはのゝ本都加布ぞ都加波須とは延とるは切あはとの差はみふて同言あゝ未は都加比は都加布を躰言ふはれしあるふて是も本同言あるなや倭建命段は撃遣ともは平遣ともはのはは同じ語ぞのひ外已之字は如此様ふ語は絶はゝ處は助字は置はこと常多し上ふ恐之あどはのはは類あ已今云予ゞ此成文は此格は傚ひて疑ぞあどゝはける類も數あゝ○宇志波祁流は師云主として其處を我物と領居はを云あゝし天皇は天下所知食ことあぞは宇志波伎坐を申せる例は

さらは無まぞ似あはは事外のら所知看あどゝ云ぞは差別あはは事と聞えと已言の意は師は主張外ゝ古言は振を布久とも云る如く流を久と云あぞ有まぞ張を波久と云あゝぞ云れき是もさる説あまど有張を波久ぞ云はは例外ゝればいかゝ

波久は刀を佩く。沓を著くれど此波久と同くて。身に著て持意あらむ。取とは。もと手に持こをあるゆ。今世ゆ国所を領ひるを。某処を取ゆ。幾万石取久を意通へり。ちて此言万葉五ゆ。宇奈原能邊爾母奥爾母神豆麻利。宇志播吉伊麻須。諸能大御神等云〻。六り。住吉乃荒人神。船舳爾牛吐賜云〻。九ゆ。此山乎牛掃神之云〻。此山とは。筑波山をいふり。十七ゆ。須賣加未能宇之波伎伊麻須。爾比可波能多知夜麻爾云〻。十九り。墨吉之吾大御神。舶乃倍爾宇之波伎座ゆぞもの。此万葉の牛吐牛掃ゆどの字に付て云説どもは。云に足らぬ強言どもあり。崇神祝詞に。山川能清地爾遷出坐氏吾地止宇須波伎坐世止云〻とあるも。須と志を通音ゆて同

言ゆ。○我御子の上に。天照大御神之御詔と云語を加て意得ぢし。彼大御神ゆ御詔を承て。高皇産霊神の詔ひ令とる御言ゆ演る處ゆぞゆり。○故先云〻は。二柱神御自ゆ御言ゆ。○令駈平とは。うの荒振邪鬼どもを駈平ゆ給ふ由ゆり。御語ゆ意を總て云はゞ。吾二神は。高皇産霊神の命以て問の御使に來ゆ。さゆゆ汝ゞ領居る葦原中国ゆ。天照大御神ゆ大詔命ゆ。我御子ゆ知さむ国と言依賜へ。ぞば。吾二神まゆ降て。国中の惡神等を駈平ゆ。ゆり。汝意いかに。御詔のゆに〻此国を。皇美麻命に避奉むや否と問給ふゆ。○疑之云〻は。二柱神

れ言よ。高皇産靈神の御使と云を。然よは非じ。吾處よ來きるふは有まじと疑しく所思に由あり。其由れ下ふ註ふを見よ。○不須許れ。延宇辨那波自と訓べし。さきふ宇辨那比麻都良自と訓るれ。語勢よりかき。抑大國主神れ此御國を經營固めて。宇志波伎坐せる事本は。上よも往く云る如く。先ず青海原淳之八百重比國土をしめ。伊邪那伎大神の御依しれ隨よ。須佐之男大神の普く所知看て。造固免給ふぢき謂ふふ。此謂のことは。第二十九段。六十五段ふどれ傳よ註るを見て知べし。ちて青海原淳之八百重を。國土全を云語ふる由も。第二十九段ふ委く論へり。はと別よ幽き由緣あり。豫美都國ず往坐さでれ得有られぞ。此由緣のことれ。第三十段れ傳よ委く云へり。入坐むとは爲給ふ物ゥら。天上よ參昇りて。天照大御神と御誓の間よ。男御子生給ひて。大御神れ。其を此御國所知看ぢき。日嗣御子と定給へる後ふ。此國土よ降坐るゲ。此等のことれ。第三十四段。三十五段。六十四段ふどれ傳よ委く云るを見て知べし。然にゲふ伊邪那伎大神の。此國土を所知看せと詔ずる御依しを畏はして。天避立極み巡見給ひ。御國の地よ歸給へ。後も。豫美都國ず直よれ往坐さば。御子神とちを見立て。國作しめ。大國主神生坐して後ふ。思欲にまふく。根國よ入坐り。此等のことゥも第六十五段ゥり。第七十九段まで。往く云るを合考ず知べし。斯て大國主神。豫美都國よ往坐て後れ。全須佐之男大神の御靈威を受給

ひて。彼大神は御璽璽の御寶ども。取持て出給へる時ゐ。大神。豫母都平坂まで追到まして。其を以て。汝が庶兄弟ども悉追撥ひて。爲大国主神。亦爲宇都志国玉神と詔へ。此等のあとぐも。第八十三段より。第八十六段までは傳ゐ註へるを見て知ばし。けて此御言は意は。彼段ゐ註る如く。此国を經營り。功業を成竟て。大国主と成。然して後り。顯国を治むる現事なれば。皇美麻命ゐ避奉りて。終ゐは其顯国の国魂神と爲れを。詔へる義ゐ。此事第八十六段は傳ゐ。委く云るを考へ合せて辨ふべし。然れば大国主神の。此国土作堅給ふ事は。須佐之男大神は御功業を。受嗣ぎ給へるゐて。言もて行ば。国生坐る二柱大神ゐ。天皇

祖神とは。最初ゐ依給ふ業を果し給ふゐ。此御依しの事。委くは第五段。第十段。第十八段。第三十一段は傳ゐ。註るを見て知べし。故ゐは大八嶋国。まと其顯事は。皇美麻命ゐ避奉て。己命は。幽事所知看べゐ義と云こをは。須佐之男神は御語ゐを。大国主神の。固を。熟悟て居給へる事ゐ。其は下は御言ゐ。吾住所をば云くて治賜はば。吾は八十坰手ゐ隱て侍むと詔へゐと。右は須佐之男大神は御言と。照し考へて知られと。ゐ。言は。其嫡后須世理毘賣命ハ。やがて彼三女神ゐ。天照大御神の。前ゐ須佐之男命ゐ。捧ひて。天降し賜ふ時ゐ。汝三神は。道中ゐ降りて。皇美麻命を助奉ると詔へゐて。後り皇美麻命を。天降も賜ふ御心ある事は知看せば。此女神を嫡妻と爲給ふ大国主神の。

此義を聞知り給ハで有ばきゝた。然れど何をとり見ても。大国主神の。後よ皇美麻命よ。此国を避奉るべき義を。固をとり知看せること。然らば前ふ天穂日命ハ。媚和し給ふた論ひあくあむ。

ふ。數年を經とは。まと今此よかく。不須許とさ詔ふる

は如何と云ふ。穂日命ハ媚附とのまだ。天降給ふと直ふた大御神の詔命を申さば。時を待て何とれき樣よ附從ひ。御心を取ゝ。其動静を伺ひ視もし。心問もして。天津神を畏み給ふ。心底をとく察得て後よ。此御言依しの事残申し出て。説和し給へ。ハ。ゝむ。故數ハ年を經とらむ事は。然も有ばき事ふおそ。抑かゝる大事ハ。向の心をとく

を傷ふとざふきバ。熟〻よ思慮を精くし多後ふうとひ

出給ふべき事れること。今世ふもさる意ハ。常

ふ多ゝふを思ひ合せて辨ふべし。是ぞ穂日命御父子の。媚附さる功の傑きて。大ふる所よた有ゝる。

多今かく二柱神よ白し給ふる。固をと右ハ大義を知看せる上ふ。穂日命ハ言をも聞看し納てた坐せど。然ばかと比類ふ。ハ御功績ありて。大国主神と坐ハを。二柱神多ち。天照大御神。高皇産靈神の命以ては降坐せれど。唯ふ其威勢をハみ示せて。いちゝも勞敬ひ給ふ有狀ハ無と。し故よ。その不禮を咎めて。まだ如此た詔ふるふと

ゝり。さるた此二柱神よ事聊とる。夷島命の副てあまだ。大国主神ハ御心ハやどた。聞知り給ひおらめど。己命とちの。親みて知給へるよ非ざまだ。若底よ仇ふむ心を祕し持てや有むと。心をとおて。まだ天御使の威勢を示せて。其動静を試み給ひゝむた。是はと二神ハ武き神性よとりてた。誠よ然も有べき事よとそ。然るよ

此の御言はしも。意は餘あまど。古文は大らゝ言足らで。ちる御心は見え難あはを。熟視て熟思ずて。文外ゝ餘意含アて。甚も嚴重れる御言ぬはを。畏ゝれど。今委く顯し申さで。阿那加麻靜まめてて。汝等我ゞ許ずの御使あアと云こと。甚疑はし。然るたまぬ我をし何ぞゝ思ふ。國生坐はゝ二柱大神。はと須佐之男大神の御功業を承嗣ぎ。天皇祖神とちの。此國を修固成せとは詔命を果し。此國を悉く作堅ゑて。邪鬼は撥平け。天皇祖の愛しみ賜ふ青人草は世ゝ經る便とあるばき事をら。種〻始ゑて。四方の外國をちずゝ數の子等を班ち遣はし。我ゞ和魂自いもき渡りもゑて。恩賴を蒙らしめ。大造は績を成竟て。かく大國主とありぬる事は。天皇祖のいぞをく所知看あとぞも。然はゝ汝等。そは御使ある由を稱へども。天皇祖ゝアは。我ゞ功績を勞問賜ふ御詔もれく。唯ゝ誇アは健びてちる禮あき狀ゝ。威勢を示せとぞも。我はゝ畏みあむや。信ゝ高皇產靈神の。我ゝ敕ふ御命あらず。慇懃ゝ勞賜ふ詔命の無ては得有はじき物ぞ。然まバ汝等は。我許ずの來ぬる御使ゝは非じ。他いやし妃神の許へ來れるゞ。所を誤りて。此ゝ來ぬるゝおぞ。故それ言こぞは。須許はじと詔ずは意あアは。穴かしこ。但しおは。餘意を添ること。過とりと思ふ人も

有あむとう。然まど前の條々は現元とる事の趣まと次段
よ。高皇産霊神れ勅ふ。汝之所詔滋有其理と詔ひて。更よ
條々して勅教はせる事どもを。熟々読味ふよ。右ふ云ご
とき意ぞ冥の御語ふ依こを。まと更よ疑ふきもれ也。
○唯。おれ下よ。信高皇産霊神之勅我御言則と云語を加
冥て意得べし。さらでは其意むをばらば。○住所は。須美加を訓べし。
所字即チ加の意れり。○天神御子ハ。文武天皇紀の詔曰よ。天都神乃
御子とあるよ従ひて訓べし。天神とは。凡て高天原ふ依
神を申ス中り。此れもはら天照大御神を指奉る例ひ。高天
原ふる神を。凡て天神と申ス由れ。第二段の傳よ委く註せり。ちて師説の如く。天忍穂
耳命ハ。其御子ふ坐くば。本をゆれ事よて。此次々ふれ。御
孫ふる邇々藝命をもぱと鶏草葺不合命をも。神武天皇

をもみふ天神御子と申せ。子とは。子孫末々までは
ひとる名ふるゲ故ふり。ちて如此申ス中れ。大凡の国神と同等からざ依由よ事を分
ふ尊奉依御稱ふ。天忍穂耳命。迩々藝命れ。天りて生坐
御子と申るれ。穂々出見命をりて來。此国よて生坐る我
申ふらはしと依御名を。上へも回して語り傳とるふり。
そまも天照大御神の御子と申ス意よふる例れど。達ふ
ことれし。然れど。天神れ御子を申ふ本の意れ。此国よて
生坐る。天神の御末よて坐由ふり。ちて御々代々れ天皇命をも。ふり申奉
依こをれ。其高御座れ。天照大御神の依賜へる御座ふる
故ふ。其よ位をば御末ふらよ。御々代々天神御子とれ
申奉るふ。此は其御座ふ位ふは。即大御神の大正統の御子ふ坐せば。然まバ此御
稱れ。天地れ際よ。ひグ天皇命一柱り限ひて申ス。御稱ふ

あむ有り。然るに漢土の酋長らが世々に天子と称ふこそ心得ぬさるに彼国ふて古く天皇と云るを。即日本とよみて其神を天神と云べきを。唯に天子と云あまた。此称やがて天神之御子と称ふも酋長の称初れるを考るに義異あらば。此れ何と云れるよ。帝王之称天子自炎帝始て。然るに彼国籍帝王世紀を云物よ。彼国の酋長もまた祝びとなるべし。然るに炎帝とは謂ひる神農がこと也と云り。炎帝の称初れるを世々の酋長らが此れいのよ心得て学びとらむと考ふよいと上代よ大名持少毘古那神を始め神等の渡りて外国々を造堅成給へ。と聞ひまた。本れ決く言語も通ひ難む故ふ天皇命れ御事を天神之御子と申に御称を彼国よも申し傳へて其を神農が何の辨もあく一国も領居れる者れ。さも云べき事と非心得して其国語も天子と称へる。よこそいみじき僭称ふらじやれ外国の酋長ぞも何の歟ぞりてが天子とれ云べき曾て其謂ふき事ふるも故よ。彼国の古書よも。ふが称ぞ紀証れさらよ無ぞ。通と云書ふ所以称天子者何王者父天母地為天之子也虎と云ひ援神契といふ物よ天覆地載謂之天子ふと云ふ。然るれもし此等の説れ如くれ鳥獣草木活

とし活るもの。生とし生るもの。尽く天を父とし。地を母ぞし。天れ覆ひ地ハ載ざふ物れ無れず。凡て天子ぞ云て可から先や。然れず彼国よて天子と云称ハ。もぞ天皇命を。天神之御子と申ぞ御称れ聞えとりしを。偷み称ふる。然ふを俗の漢学ぞる輩ふど返らまふ。天神之御子と申ぞ御名ハ。天子とかける文字よ。設けと訓ぞふぞ云も有るれ。其本末を辨へざる故の狂説よる。ぞ有れる穴うしふ。眞天子れ御民と有ふが。外国々れ酋長ふどを天子と云むれ。最も忌々しき言れり。彼を王ぞ云むざよ。既ふ親王れ御子を王と申に御令れある上れ憚ふしと云ぞらば。眞の学問よ志ぢむ人れ。ぞく此旨を思ふべきふめ。

○天津日嗣。師云万葉歌ふは。安麻能日継ともを先。此れ天津日。大御神の。大御任を受傳坐て。其大御業を嗣々よ知看に由れ御稱ふめ。天武天皇紀ふ。皇祖等之騰極と云る處ふ。古云日嗣也。と註せられと。書紀ふどよれ漢国

よて天子と称ふ者の位れう子よ用ふる字を書るをむ凡てこあア。ツ。ヒ。ツ。ギとをめり。けて此御位を嗣給ふぼき儲れ皇子ぢ。日嗣御子を申し奉るあり。皇太子の字を當ぢ。かくて右の意ち。必動くはじく。誰も然思定ぬて有ぬべき物ぬまど。今此段よ就て。別よ今一ッの考ちの。繼は借字。給よて。天津日大御神の給寄し賜ふ物を受納知看ぬと。天津日繼所知とち申ぬ。給寄賜物とは。即天下れ百姓の奉進る。諸の御都岐物よて。是即天照日大御神れ。天皇よ給寄し賜ふ物ぬ。みぬぎ物を。平兼盛集の哥ふ。ひぬ苑もれとち。けて御都岐物れ都岐も。供給の意ぬり。今れ俗言よ。人よ物を美都具といひ。まと物を都ぐ久流と云も本同じ。さて給とち。上さる人をり。下ぬる者よ賜ふよ限れる如く思ふ。ぬをぢ。さよ非ぬ。下をり上ぬ奉るふもいふ。故朝廷ふ

奉進るをも。美都岐とち云ぬり。けて其種く物の中よち。稻を主とせ。其は書紀よ。天照大御神れ勅曰よ。以吾天原所御齋庭之穗亦。當御於吾兒と見え。大嘗會中臣壽詞ぬ。天津御膳遠。長御膳乃遠御膳止。千秋乃五百秋仁。瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止。事依志奉氏。天降坐云くとぬると。大殿祭詞よ。此乃天津高御座爾坐氏。天津日嗣乎。万千秋乃長秋爾。大八洲豐葦原瑞穗國乎。安國止平氣久所知食止言寄奉賜比氏。とぬるとを合せ考ぬて。日給の意を思ふぼし。万千秋云くは。もち稻よ係て云る由ち。前よ委く解るぬ如し。けて天津日嗣乎。万千秋云くと。ぬぎあるち。全天照大御神の給寄し賜ふ。大八洲國れ稻穗を。万千秋よ所知食とれ意ぬり。かれ中臣壽詞ち。大嘗よ於

きて申に故よ由庭仁所知食といひ大殿祭に天下知看に凡ての御上ふて申に故よ瑞穂国乎所知食と云る共よ其指物に同稲穂よて其中ふ主とし首をにるに齋庭穂に穂あり故書紀ふ彼勅ふに主をし首と云ふ齋庭之穂を詔ひ寄して其中よ天下の百姓に奉貢る前よも云へる稲まと種々に御調物もみふ兼含みとり

如く皇御国に稲よ殊ふ深き所由ふて右に如く大御神の厳重き大詔も坐て後世よ至るはでめ万の政に有るゞ中ふも大嘗を又に大事と云給ふもにぞ然きば天津日継知食と申せど即天下知食に御事ふもふれ

ふ外ゆけど天津日継とのみ云て所知食といたびまと日嗣御子ふども申に多ぐひに普く云に也きて今此よ登陀流云々ふ連きとるに下ふ云ふ如く御膳の事よれ〳〵ば即彼日大御神の給寄し賜ふ稲以て炊く御膳を所知食む其天之御巣と云意よ云るに

ふ若多〳〵天下知食に御位のおを〳〵せど此ふに必しも用ふき言ふり多〳〵よ天神御子之登陀琉云々とに云てふり ○登陀琉天之御巣ハ師云此は多〳〵御殿を云ぬべし

りやと前よに思ひしりども然よに非ぞ下よ同言のふふよ疑烟に之を云へるよ就て熟思ふり此に御庖厨に竈所の上乃炊烟に発騰る處を云ふり御庖厨ハ俗よ云御臺所ふり其構に上代に如何よ有々む知難々きと御巣とふるふ付て推て心見ふ云はゞ烟を出さむ爲よ竈所に上に屋を いさ〳〵うばこの上葺遺して窓の如く開とふ所あ上し

ふや。偖其處ハ蘆藿の露れしとまで。簀ある故よ。御簀とも云ふ。巣も借字あり。凡て竹あどを編れらべて。簡の透とる物を簀と云。簾れぜも其意也名あり。はと天之と云も。今世よ竈上の。炊烟也かゝ。ふ處を阿麻と云は其ふや。尼の音也如く呼ぶあり。體源抄よ。昔日吉行幸也時よ。鞨鼓の筒を社頭よて失ひて。二十餘年を經と巳れふ後ふ。大津也邊ふて。是を求出とふ事を云る處よ。阿麻と云物りちし上て有りれむ。疑烟むみとゆれまども。少ゝ不損ふ巳と云巳。まと例の格也。天之と見むも惡ゝらし。ちて登陀琉也。いぞ〳〵心得難きを。例也強て云ば。富足の意ふらむゝ。富也美を畧く例あり。其故也。先古も今も人也家也富ることよも。炊烟の繁く

起由を云ひ。貧きふとよも。炊烟の發ゑ由を云こと。仁德天皇卷よ。於国中烟不發。国皆貧窮云〻。於国滿烟。故爲人民富ふどあふゞ如く。也まば。炊烟也稠く發こを祝て。やゞて富足と云効はしけむ。然まで此也。炊烟の繁く立登ふ。天之御巣と云こをふらむゝ。上代よも。此炊烟也騰る處を重くふゝる故ふ。然富足てふ祝言もあり。また今此ふも。其事を主と云る也ふべし。應神天皇也御歌よ。毛毛知陀流夜邇波母美由。とある知陀流也。此の登陀流と同くて。ふも富を切也て知ゑ云ふらむ。百千足也意よもあらば。然まで繁く烟の發騰る。百の家庭也所見る由ふ巳。また烟の繁く立を見とるひて。富足れ巳とれもふ心とせむも同じ。はと大殿祭祝詞よ。此乃敷坐

大宮地底津磐根乃極美下津綱根波府虫能禍無久。高天原波青雲乃靄久極美。天之皿垂飛鳥乃禍無久とゐる。皿垂も同じ。但し此れやがて。彼烟の騰る処れ名よして云るゐきばば。知陀理と訓べし。今本も然訓ゐ。彼登陀流天之御巣と云をおく〳〵めて。飛鳥乃禍とは。此皿垂の直よ天之知陀理と云るゐり。

處れ屋を葺遺して開とゐ故よ。虚空高く飛鳥れ。或れ毒物ゐはき何よまれ。咋持來。まとは糞ゐどゐまれ。竈上ゐ墜しゐどゐる事の有むを云ゐる法し。祝詞考の。此皿垂の説れいみじき誤れゐと神武天皇紀ゐ。細矛千足国。とある千足も同じ事よて。炊烟の繁く起て。富足国ゐゐ。彼毛〻知陀流云〻てふ大御哥と思ひ合ゐべし。細戈れ枕詞よて。玉鉾之御路と云と同くて。知てふ言ゐか〳〵るれとゐり。此等を思ひ竝

ばて考ふゐし。今云。久老が日本紀哥解よ。彼毛〻知陀流てふ詞をときて。百煤垂れ。煤を須志と云て。万葉十一よ。難波人葦火燒屋之酢四手雖有。を須志と云ゐり。須志の約り志ゐるを。知よ轉しとる言ゐり。まと此知を登よ轉して。登陀流天之新巣之凝烟之。云〻と云るれ。事もゐく通ゐる如くゐきど。却て物どゐし。けて今大国主神の。己命れ御舍の構を。かくれ如く乞ゐ万ふは。専御膳れ事よゐなてゐとゐ故よ。其御廚の構をしも乞給ふゐゐ。下文よ。櫛八玉神為膳夫。云〻の事以て知べし。然れど天津日繼所知とあるも。彼日給れ稻もて。炊き料理る御膳を所聞食ゐ。其御廚の如くゐ。と云意よ連れとゐ。と明ゐし。天慶六年日本紀竟宴得大鷦鷯天皇師輔公哥よ。大鷦鷯須女羅賀与〻利多津氣敷里阿麻能比都幾仁裳江万散留賀奈。これよ烟ゐ天之日嗣のことを詠とゐ万冴るれ。古意を知てよみ給へるゐり。おれゐ。ゐら合へるゐり。何よはき。右ゐ云へる日嗣の考へよ由

ゐと其御廚の中よも。彼炊烟の騰る處を重くする故
よ。分て天之御巣を云ふゐ。さて殊よ天神御子之御巣の
如くふと乞白し給ふを思へ
ぞ。其構の狀必凡人れ家のとは異ふることと有ふるぞし。
まと垂仁天皇卷よも此出雲大神の御喩言ふ修理我宮
如天皇れ御舍者御子必眞事登波牟とあり。此段
と合せて思ふよ必濱き所以ある事れるべし。○治賜
則治と云ふとの意れ。上よ治吾前則。とゐゐし處よ註へ
ゲ如し。第九十五段れ傳見るべし。○百不足れ。百ふ足ぬ八十と連け
ふる發語ふゐ。下よ引く歌ども残見て知るし。まと百足
百足らぐ榊まと五十槻ふぐめ連けを らば山田
めり。委くれ冠辞考を見て知るべし。○八十坰手。師説
ふ。坰れ隈れゐ。古事記よは。多く此字を書ゐ。坰字よ。久麻
れ見えぐ。尓雅ふ林外謂之坰とゐる。ときらの意をり久
麻よ用るり。中卷よ。硐とも作り。硐字よも。久麻れ意れ見

えぐ。若れ同字よ。此方よて。土偏
石偏を加ふるふれ非るり。書紀よ。百不足之八十隈
ゆ書て。隈此謂矩磨渥とゐゐ。ふの渥字を。ヂの假名とし
て訓むハ非ふり。デれ假字
ゐれ。手れ道ふゐ。氐と知ゆれ通音ふり。万葉よ道之永手と多くよ見
ゐと。道之長乳齒神と申ぐ御名とを合せて。永手は永道
ふるふゆを知ゐ。まと此の手も道れゐことを曉るべし。
万葉一よ。川隈之八十阿不落。二了。此道之八十隈毎。十三
ふ。道前八十阿毎。ふども見ゆとあゐ。ふゐ此下よ。此の文
れど。糠らぬ説れゆぞ採用ひ。○隱而ハ。顯世を去て。幽
ぐ。其れ下よ云を見て知べし。意を解れとる説あ
世ふれゐ。海島ふ隱居し給ふを云。ふど其を八十坰手よ
と云るれ。漢意よて非ふり。
ゆは詔へり。然ゐは八十坰手とは。何處を其許と指定む

ふ處ふく云へる語よて。後遂よ。上件乞白し給ふ宮よ鎮坐し奉る。も。其御形を顯世ふ現せ給ひ。何處よ坐とも人よ知られず。隱坐まし狀を詔ふ形容言外ひ。師說ふ。八十坰手ひ。八十と多くの隈路を經行て。甚遠き處と云へるりて。其心ざし給ふ処ひ。卽黃泉國ふり。抑此神ひ。須佐之男大神の御子孫と坐て。中ごろ一さび其大神の坐ます黃泉國よ往坐しよ依て。大ふる功を為て。天下を經營と乃へり。しこと。上ひ殺くよ見えさるゞ如くよて。今此御國を。天神御子ふ避奉て。まと終よ其國ふ隱坐こと。深き理ある。ゝも。と言れしひ違へひ。其ひ万葉三ふ。百不足八十隈路爾手向爲者。過去人爾蓋相牟鴨。とを免ふ歌ひひ。隈路を今本よ。隅坂とのるひ誤ふり。今は岡部翁。まと久老說よ此ひ人ひ死ふふを悼みて詠るをりて。改めて引とり。歌ふるゞ。一首ひ意ハ。過去し人の魂ひ行方は。何處とも

知られぬを。八十の隈路よ手向を爲てば。逢ふこゝも有ふむゝ。と云ふふひ。此歌り依て。八十隈手て爲言の狀を知ぢし。記傳ふも此哥を引て。殊よ此ふ由あり。八十隈路ひ。黃泉路を云るふり。と云れつきど然ら𡚁。豫美路ひ。伊邪那岐大神。まと大國主神も。前よ往來し給へれど。八十と隈路の有ゞよは思ひきびまと書紀よ。海宮よ往く路ひこゝを。雖隔八重之隈と。海神の詔ふることを。一ッ義よ云へもあれど。八十と八重ゝひ。言義いさく異ふひ。さるひ八十ゝは。八十伴緒。八十島ふどひ類よ。ふゞふ數の多きをいひ。八重ゝは。八重疊。八重棚雲ふどの類よ。重ふる數ひ多よを云ふれず。混ふぢゝらびゞ。夜見國り往坐むとの御言ふらば。隔於八重之隈路而隱侍焉。ふぢこそ白し給ふぢき事ふるまや。○侍焉ひ。佐母良比那牟と訓べし。佐母良布ひ。佐は眞ひ意。母良布は母流を延と言よて。母流とは。何事よまゝ心を於けて。伺ひ居る歟云こゝをふる由ひ。

上に師說を擧て既に註せり。第五十七段、令ニ大宮能賣ノ命ヲ侍ニ其ノ御前ニとある處の傳見るべし。さて今此ノ神の如是白し給ふは。上ノ件の如く。御何しらひ坐さば。我は八十坰手に隱てし如く。顯世をば。御命のまに〳〵避奉て。隱れながらも。なほ天神ノ御子は御前に伺候居る心ばせにて。幽世をば守衛奉らむ。不ば御命に隨ひ奉らじとは意なり。但し此に、幽事治むとハ詔はねど。其は本より定まる事なきぞ。其事をも心に含み。まさ唯に威勢をもて。推取らむとしては。假令天神は詔命にもあれ。其理をしめ申さば。むげには避奉らじと云意をも含めること。上に疑之云云と申し給へる御言を。立返り思ひ合せて辨ふべし。穴畏この大神はしも。上に註る如く。建速須佐之男ノ大神の大御稜威を盈く受嗣賜はりて。大國主となり給へる神に坐せむ。其御稜威を震起し給はむには。彼ノ大神に劣り給ふまじきこと。申すも更なり。然れバ此ノ時しも。御使に來坐る神たちよく其理を聞取まして。産靈ノ大神に白し給ひ。産靈ノ大神しも。案然ることゝ御諾ひまして。乞白し給せしに勝りて。厚く御あしらひ坐しきばこそ。事無りけれ。もし諾ひ給はざらましかバ。何なる大柱事をか引出なむ。其は彼ノ岩屋戸ノ段に。須佐之男ノ大神の御荒び坐しゝば。無上至ぬ天照大御神すら。岩屋戸を閇て隱り避給ひ。八百万ノ神の功德もみな止て。高皇產靈ノ神させに。千ぢに御心を苦しみ給へる。御有状なりしに思ひ合せて。此ノ段をも想像り奉るべし。穴かしこ。

於是經津主神。還昇而。報告出

コヽニフツヌシノカミ カヘリノボリテ マヲシタマフ

時。高皇產靈神。乃還遣二柱神

トキニ タカミムスビノカミ スナハチカヘシツカハシテ フタバシラノカミヲ

而敕大國主神曰。今聞汝出所
言。深有其理。故更條條而敕出。
夫汝出所治出現事者。宜吾皇
美麻命治。汝者可治神事。又汝
出應住百千足天日隅宮者。今

當供造。其宮造出制者。乃縱横。
以御量千尋栲縄。百結二。八十
結二下而。柱則高太。板則廣厚。
將田供佃。又爲汝出往來遊海
出具。高橋及天鳥船亦將供造。

於天安河亦造打橋又供造百
八十縫出白楯又當主汝出祭
祀者天穗日命也令詔出時大
国主神白曰天神出敕敎慇懃
如此敢不從命乎吾兒八重言

代主神爲鳥遊漁而在三津出
碕今問出當報命白而以熊野
諸手船亦名天鳩船載使者稻背脛
命天鳥船神是也遣而以天神出敕致
言代主神而令問報命出辭矣

於是ハ。前條ある大国主神の御言を。二柱神の聞して。實然る理れりと所思せる意ばえを。含めて見るばし。然らでは。還昇と云ふ。ばき由あし。ちて還昇と云ふは。經津主神の御名れみ有まど。二柱ともふ昇らせふことと。下ふ還遣二柱神をたのるふて知らふ。○報告ハ。麻袁志多麻布と訓べし。上件大国主神の白し給ふ事を。天神ふ報告あるふあり。○渡有其理は。麻許登爾其伊波禮阿理と訓べし。字れまゝふ訓むは。漢籍読あり。ちて此の御敕ふ依れば。產靈神も大国主神ふ。然ばゝ已好し。ち意あ已とは。固ち已知看ちゝ已れり。故初ふ。天穂日命を遣し給ふよゆ。二柱神を遣し給ふまでも。其御意の見え給ふことれ已。外国籍のみ読あきて。古意を知ざらむ人は。其籍等ふ尊しと云る者どめれ。他の心を底までも見通れ物れ如く。まと未然れ事をも知る物と立とる妄説ふうち惑ひて。神は彼等ふ及ぶあぞや思ふらむ。家ふ師説の如く。神は彼等とハいとく趣れ異あることは。眞れ古意を得とらむ人は。ちく辨ずあむ物ぞ。○條ゝハ袁遲袁遲を訓べし。下ふ凡て七條れ敕教あふを云。○汝所治之現事とは。顯事と云ず同く。此大神れ大八嶋国を經營固めて。大国主神をあり はし。世を治め坐る。万れ御政事を云。其は下ふ謂ゆる神事ふ對ずて。現き事あきだれ已。○我皇美麻命。は高皇產靈神の御言れゞら。天照大御神の詔を受て。敕ふ處あふ故ふかく詔ずゆ。まと唯ふ親して詔ずる御言と見むも惡らじ。○汝者可治

神事とは。日本紀纂疏に。神事則冥府之事。非祭祀牲幣之禮也。と言へるが如くにて。幽事と云ふ同じ。口訣に。神事謂奉神之祭祀也。とあるは。いみじき誤あり。

あを現事神事はおをは。下に委く註せむ。

第百二十三段の傳見るべし。○百千足は。本に五十足とあるを。眞竜が說ふ依て。前ふは五は衍に て。十足の誤と為れるを。今は訂正本に。五十毛〻知陀流は百千は誤乎。と云ふ考に よりて改め為。

と訓ぶし。前段の師說ふ引とる。應神天皇は御哥に見えり。

ちて毛〻は百は義ふ非ず。諸の意あり。知陀流は前に登陀流とあるに同く。富足は意外に。委くは應神天皇卷御歌ふ。百〻知陀流とあふ處に註せる。師說を見て知ぶし。○天日隅宮は。師言ふ。昔をり比須美能宮と訓る。師說に。大國主神の隱退き給へふ意にて。比曾麻理乃宮あに云れし。是もちる說あるとも。出雲風土記に。日栖とあるを合せて思ふに。比須乃宮と訓べし。隅を須と云とは上にも云へり。さて比須と御巢と相近るまで。是若くは御巢と同じ地にや有む。日隅宮の解に。方角は去とあるを云る舊說は。例は漢意にて云にとらば。を言ましは然說ふて。前條に乞白し給ふふ宮の事を詔へるあれば。誠に日隅宮は。御巢宮てふことあり。に。○今當供造とは。前に乞白し給へふを諾はして。今供造せむと敕ふあに。○制を舊く能理とも。加多知とも訓來為まど。佐麻と訓べし。○縱横御量ぶれを。に結下而を云まで。出雲風土記に。神魂命の

詔ふ。五十足天日栖宮之縦横御量千尋栲縄持而百結〻八十結〻下而此天御量持而所造天下大神之宮造奉と
あはと。書紀とを合せて。文を成せるおと既ふ云ふ已。此段
れ徴見るべし天御量とは。大殿祭詞ふ。以天津御量氏皇御孫之
命乃御殿乎今奥山乃大峡小峡尓立留木乎云〻伐採氏。
云〻。齋柱立氏皇御孫之命乃。天之御翳日之御翳止造奉
仕禮留云〻。皆有ふ同く。天神の定給へは度量を云ふ。
前ふは其宮の縦横の量を云ふ。此は皇産霊大神の定給
らむと思ひしらど。然ふハ非ず
給ふは度制を以て今古れ日栖宮を造營ふ給へる事
を言へる歟已。此事委くは皇國度制考ふ云へり。就て見るべし。○千尋栲縄。千尋は。

あゞ縄の長ちを云。栲縄は師説れ如く。栲木の皮以て索
はは縄ふめ。栲の事は第四十八段白和幣れ下ふ委く註り。
まと冠辞考栲衾栲角栲縄ふどの條をも見る
べし。此縄上代ふは。普く何ふも用ひ抜と思ふくて。古書ふ
多く見えさめ。下百二十五段櫛八玉神の祝詞ふも見え
千引尓母何等ふどあ已。齊明天皇
ふり。万葉ふも。栲縄之長命乎。まと栲縄能
紀ふ。佐伯連栲縄てふ人名もあり。○百結〻八十結〻下
而云〻。縄ふ幾條も結合せて。横を量已。まと結下て縦を
量已。高く廣く造はは由れ古文ふるゞ。口訣ふ。敷地之牓示
ふり。但纂疏ふ。今木匠所用之墨縄也。と見え。又或説ふ。
不言方量而以結縄為説。古代淳素之風と云へるは宜し。は
ふ大殿祭詞ふ。此乃敷坐大宮地波。底津磐根乃極美下津
綱根。古語云。番縄之類謂之綱根。波府虫能禍無久云〻。引結幣留葛目

能緩比取葺計魯草乃噪岐無久と見え。顯宗天皇紀の室壽御語ふ。取結繩葛者。此家長御壽之堅也あど有は。いを上代の家造ハ。いぢおをも繩葛を以て。結固めし故れ語あまぢ。此も其由ゥと毛所由也。若然もてらば下字ハ衍也。と云る説のとまり。ちて柱は。高く太祝を以て貴とし。板た廣く厚きを美とゝるは常あ卍是謂ふを卍て。杵築大社は。其構殊ふ廣く大きふて。他社ふ勝れり。故大社とし也名ふ負て。今世ふ至ふまでも尚然卍とあむ。玉勝間ふ。出雲大社神殿の高さ。上古のた三十二丈あり。中古ふた十六丈なり。今世れた八丈あり。古へれ時乃図を。金輪の造営れ図といひて。今も図造れ家ふ傳へもと卍。心得ぬことれみ多ゥまど。皆あゝ本のは〳〵写し取れり。今世れ御殿も。大ゥとの御構ハ。此

図のごをくあ卍とぞ。を云て。其図を著さまとり。就て見るばし。谷川氏た。聞之。其製四方施八柱。中央有心柱。自礎至棟長十三間半。本口徑九尺といへり。猶下ふ委く註ふを見るばし。第百二十二段の傳を見よ。○將田供佃とは。神御食ふ獻る御稻を作る田を。供佃しめ給れむをあ卍。○往來遊海た。和多爾加用比阿曾夫と訓べし。海を和多と云由た。第二十五段の傳ふ註り。○高橋ハ。或説ふ。今れ反橋を云をい可り。然も有むゥ。されど海ふ橋た似ぢはしからぢ。此れ海とのみ云て。川ふ遊び給ふ具をもの紛て云。ふゥ。偖まと本書ふ。此ふ浮橋をも載さまど。彼た虛空を乘る船れ名あまぢ。水ふ遊ぶ具ふ出あるは。傳れ誤ある故ふ省きぢ。○まと後ふ按ゆふ。名た彼虛空を乘る船と同じけまど。別物ふて。桴あどを云ふハ非じゥとも思も。もし然もてらば。此を除れるを誤をゝべし。○天鳥船は。鳥れ如く速行を名ふ負せぢらむ。猶下ふ云を見よ。○

打橋ハ。師説ヨ。移橋ヵ。都志ハ知と切まる是ヒ尋常の橋ヒ如くふ。同所ヨ定めて。懸おく橋ふヒ非ヒて。時ヨ臨みて。何方ヲ渉ヒとも移し持行て懸ふる故ヒ名ふり。打渡ヒ橋ふり。と云ふ説ヒ聞えば。ヒの。万葉十ヨ。機蹋木持往而天河。打橋度公之來爲。とも見ゆ。谷川氏説ふ。万葉ヨ。天在一ッ棚橋。まと天漢棚橋渡云くふど詠る。源氏物語。枕草子ふどヨ見えとる棚橋も。此ヨ同じと云り。然ヒの。ならむか。○百八十縫之白楯。百八十は。楯の數多ヒを云。縫とし也云は。縫て製る物ふまだ別ヒ。百二十六段ヨ。天石楯縫直之処云楯縫といひ。白楯とは。纂疏ヨ。白、楯縫といふ氏あるうても知ばし。木邑。大嘗祭時。宮門之南立楯戈。是類也ヒ見え。口訣ヲ。白楯者。神社所用而神幸之時以爲圍也とのの。纂疏ふ。白、木、色と言へるを思ふヨ。餘ふ飾ふく造れるを云ふ。凡て楯の製状のふヒて。既ヨ第五十段ヒ傳ヨ委く註へゆき。ちて今楯の事ヒかく詔ふ。社の周ふも。ふて。はと神幸ヨも用ふる料とて聞ゆる物のら。猶別ヨ由有ゞヨ所思れど。其て未思ひ得ず。和名抄征戰具ヨ。長日歩楯。和名太天。歩兵所持也といひ。字彙ヨ。楯所以蔽身扞目云く。神武天皇紀ヨ。島見彦ヒ戰ふ時ふ。取所入御船之楯而下立とも見ゆ。○當主汝之祭祀者天穗日命也て。前ヨ此、神天降ヒて。大国主神ヒ媚和せまだ。彼神の御心ふ應へふふと知べし。天照大御神ヒ御子。はと日嗣御子ヒ御弟ヒる神をしも。彼神ヒ御心ヨ應へるからヨ。其祭祀を主ふ神とふ定給へるて。御崇敬の極ふぞ有りふ。ふ本第百二十

四段より云ふを見ばし。○敕教て。美佐登志と訓べし。○慇懃如此て。加久斯毛泥母許呂那流袁を訓ばし。斯毛て助詞あり。さて泥牟碁呂と訓て。音便よて正らぐ。万葉よ。葦根乃懃見巻。また菅根乃懃懇ぶぞ。隠慇懃ふど猶多ゝり。谷川氏說よ。言如根也。日本紀及万葉集。如字訓毛許呂と云ぷ。然も有べし。○敢不從命乎は。伊加傳美許登袁曾牟伎麻都良牟と訓ばし。字のまゝよ訓むて。漢籍読ふり。

ちて天皇祖神の。上件れ敕教よ依て。今此り其本をぷの御心をぞ露てし給へるれゆゝぷ。

一旦王者勃興理當收焉則別必爲之處漸令彼退避謙讓可矣不能然擅權起其攘奪之心彼示損命相拒是必招亂之道也天祖恐有鑑此機故曰聞汝所言深有其理而殊下制誡爲彼計益慇懃丁寧如此則誰人逆天命坐取敗乎大

己貴命避國長隱誠有由哉と云ふり。熟く此說を読味ふよ。彼公の時てしも。足利氏の事狀ぷて。天皇を蔑し奉まる世ふりしらば。彼承久建武れ御世ふどの事をも思ひ寄せ。深き御心ありて書れし言ふるべし。然れども。此の傳よて更よ由ふく。古意を得給はざる說ふぞ有ゝる。

○島遊ハ。舊く登理能阿曾備を訓るふ從ふばし。師云野山海川よ出て。島を狩て遊ぶを云ぷ。此て海辺ふまバ。むゑと水鳥を狩るふるべし。雄畧天皇大御歌よ。猪茂射給へ涼事を。阿蘇婆志斯とをみ給ゑゆ。是狩をも遊びと云證ふぷ。師て島遊を登賀理と訓まき。其もさる事ぷまども。書紀よも此て。遊島まさて射島。遨遊ふぐ〳〵書て。一ッ的獵狩ふどの字をバ書ざるを思ゑて。ふゐ阿曾備を訓べきれり。山城風土記ふ。王依比賣。於石川瀨見小川之遊爲時。と云涼て女ふまばゝ。川邊よ逍遙ける事うとも聞ゆまぞぬ。是も外ゐ

魚釣を云ふるぼし。○漁ハ古事記ふ。取魚とゐるを。岡部翁の。須那杼理と訓れおるよ依て書ア。其を和名抄ふ。漁説文云捕魚也。訓須奈度利とゐり。ふを須那杼理のことは。第百四十二段。猿田毘古神ゑ処ふ註せり。師云。此鳥遊取魚を好み賜ひしおを。隱道ゑ意ぞ外ど云を。例の漢意ふア。更よさる事ふをゐらば。○三津之崎は。出雲風土記ふ。嶋根郡ふ。御津濱廣二百八十歩とゐる處ふアと師説ふア。風土記抄よ。御津今水嶋也と云り。ちて同郡ふ。御津社もあり。抄よ。加賀郷今水浦本宮也とゐアア。但し神名式よを載られ玄。古事記よ。御大之前書紀正書ア。三穂碕とゐるも。此郡の崎ふり。ちて仁多郡ふも。三津郷と云ゐアて。其を味鉏高日子根神の。三津と言ア故事をり起れる地名外ふ。此事を。第百一段を見て知べし。彼神と言代主神と。一神ふ。ふを。上よ云ふ如く外れず。此の地名も。彼三津郷をり移れふ。ふハ非ざるっぽと風土記ふ。楯縫郡ふも。御津嶋。御津濱と竝び在て。御津社と云もゐア。抄よ。御津濱を。俗よ三津浦といふ。御津社を。楯縫郡三津浦よ在といへり。神名式ふ。御津神社をある是ふア。○今問之當報命とは。大國主神已命ハ。產巢日大神の敕教ふ違はじを御心を定給へまど。御長子ふ坐せず。言代主神の心をも問て。御答を白さむを言へふふア。古事記よを。前ふ不須許と詔ふる御言ふく。唯よ僕者不得白。我子八重言代主神是可白とゐるよ就て。師説ふ。此時大穴年遲神を。年老坐て。多く事代主神ふ事を讓り給ひて。事代主神ぞ。眞盛よ威勢ありゝむ。故自の心一よてを。御答を得白し賜をざるふ

ひ。書紀、本文よも、問吾子、然後、將報とありと云ふ。古事記の傳も更あり。書紀、本文の傳も、甚く誤れる傳あるや。

○熊野諸手船。熊野ハ意宇郡ノ地名あるはよと。既よ出とひ。第三十四段の傳見べし。彼處よて造れるはあるべし。其ノ方葉よ。伊豆手船と云も有れど。

一船名曰熊野。後化爲石蓋。此類也とあるはあるべし。風土記云。昔野間郡有船の名高きよ依て。其名を負とる船あるべし。諸手船としも云は。纂疏よ。言數多水手操舟也とあれど。數多ノ水手の諸手ハ漕ぐ如く速き由あらむ。

○天鳩船ハ。此も纂疏よ。播磨風土記を引て。仁德時播磨明石驛家有一井。楠樹生其上。時人伐樹造舟。其迅如飛。一楫去越七浪。故名曰速鳥。此云天鴿船乃速鳥之義也。一名天鳥船とありひ。

播磨風土記の文ノ。釈紀よ引とひ。孝謙天皇紀。天平寶字二年三月の處よ。船名播磨速鳥並叙從五位下。其冠者各以錦造と云ふと。も見も。此ノ唐使の乘る船あるる故よ。階級を賜へる由あひ。但し並各あど有ノ。此船ノ名みりは非ざはう。ちて纂疏よ。此船ノ一名を。天鳥船と云よし言ずれど。彼を此とは各別ふて。共よ鳥てふ名を負はノ。速きを稱とはあひ。

○稲背脛命。天鳥船神是也。名義。稲背ハ諾否よて。言代主神の諾否を問へはあ故ふ負ずひ。諾否のことハ。前段伊多佐之小汀ノ処よ。委く註ずるを見はべし。脛は。丁を余富呂と云ふをく。使者ふ立とる故ノ名ふはべし。景行天皇巻よ。七拳脛と云人ありノ。孝德天皇紀ふも。八掬脛を云ありノ。越後風上記よも。同名の人ありて。其脛長八掬。多力大強ふど見えとり。ちて此神やでて。天鳥船神

示名、天夷島命。ある由は。まだ書紀ふた。本文よ記せる如く。稻背脛とあふを。古事記よた。遣天鳥船神と見え。建御雷神の始めて天降ひ給ふ時ふ。副て降坐る神名をも。彼記りた天鳥船神とあふを。出雲神賀詞りは。穂日命の御子。天夷鳥命をあのり。まと書紀よ。穂日命を国體見よ天降し給へる後よ。はと其子大背飯三熊之大人。示名、武三熊之大人。を遣けとあり。崇神祝詞りた。武三熊之命を遣けとあり。彼此ね傳伝考合せて。同神の名ね。種くよ傳れる事を曉るぢし。

ふ第三十八段。第百六段。第百十四段。ね傳まと徴ふ云るを見て知るべし。

ふふ名義た。内山眞龍説ね如く。かね熊野諸手船よ乘て。鳥ね如く速行とふ由ふふべし。師説よ。鳥船た。船鳥を下上言ふるぢし。とあのまど然らば。はと大背飯と負ふ名義ハ。師も且く言れふふ如く。背飯た背脛を同言ふて。波岐た比。と切まる。大諸脛ふるぢし。第百六段の末よ註せる師説を見べし。○致た。師の能理を訓れとふよ従ふ。ぢし。○令問とハ。吾た天神ね敕教ねまふく。此国た天神御子よ避奉らむを思ふを。汝ていのよ報命さむを思ふと。海路を遣て問し。ね給へふふ。此海路の事。眞龍ゲ考よ云出雲国た。風土記の頃た。出雲郡と。神門郡と。大河を堺ひふて。国は於〻きとるを。上代よハ。出雲郡ハ。神門郡と。ハ海を牙ど〻。嶋根郡。楯縫郡。出雲郡と。此四郡の地た放き。とふ島よて。入海た。西の大海まで。を有りとめしふ。されむ今見るふも。出雲郡と。神門郡との堺ね辺。今道二里ばかりのふど。平原砂地あり。上代た此とおろ海よて。東

西牙きまとりしあり。と云、稲背脛命の。三津之埼へ通ひしたる。此海路あり。

於是積羽八重言代主神。亦云都波八重事代主神。令言其父大神曰。恐出。如天神出命。此国者。可立奉天神出御子。吾亦不違奉云而。即蹈傾其船柂而。天逆手。於八重青柴垣打成而。隱坐矣。此者坐宇奈提出神奈備。及葛城出鴨社神也。

於是ハ。使者稲背脛命の。大国主神をゆ致給ふ。天神の敕を演とる伝承とは文あり。○其父大神とは。古事記よ。大

国主神を。此り始めて大神と云へり。伊邪那岐命を。御禊段を。大神と申し。須佐之男命を。大蛇を斬給へる後を。大神と申せるより準へて思ふべし。今や大八嶋国を皇美麻命ふ譲白して。幽冥の大神と爲給ふ時ある故ふ。大神と申せるよや。第百十四段ふ。国作之大神とあるを。出雲国造神賀詞を採れるふまべし。此ふ大神をあるとを本とり別ふり。○令言とを。稲背脛命ふ。返事ふ言ちし免給へ依れ。恐之ハ。上ふあるとしふ同じ。○可立奉ハ。多氏麻都理多麻閉と訓べし。立字を添て書る由を。上ふ委く註せり。第六十八段の傳見るべし。○其船柢とは。言代主神の。三津之埼ふ狩し給ふと。乗せる船柢ふ。古事記ふハ。其船とのみ有を。柢字を書紀ふ依れり。ちて柢を閉と訓添て。舊ふ從へり。されど此字和名抄ふは。野王案柢大船旁板也。和名不奈太那を。あるとして。別ふ舳字を出し。兼名苑云。船前頭謂之舳。和名閉。漢語抄云。舟頭制水處也と見も。されバ此の柢字を。布那太那と訓ばきゝとも思へど。日本紀ふ。船柢此云浮那能倍を。あれば。彼紀ふを。此字閉のとふ用ひとるふり。○蹈傾ハ。布美加多夫祁氏ふ。清寧天皇巻。哥ふ。加多夫氏とあり。○天逆手を。師説ふ。伊勢物語ふ。天の逆手を。拍て。れろひ居を。あるを。相照して思ふふ。古へふ逆手を。拍て。物を。呪る術。俗ふいふ麻自那比の有しふり。ちて彼物語ふ。人を詛ふとを。左々しるを。上代ふを。然るを。悪事のみれらば。吉善事ふも渉りて。為けむこと。此の故事ふ知らをとり。此を船を柴垣ふ変化ふと。兄れ呪術ふれば。ふり。さて逆手を拍と云拍状を。先常ふ手を拍を。掌を。うを。此を逆ふ翻して。掌を外ふふして拍。を云り。又ハ常ふを。兩の掌を。同じさまを對へて拍。を。此を左と右と

れ上下を逆よりやり違へて拍を云ふ。此二の間今定免ゞ
とし。俗ふ横手拍と云ふともいふる。左右を竪と横を
よちゞ牙て拍を云べし。若そ是を準牙て云む。逆手
も後ふ云へる方ふもや有む。とあれど然らば。此ハ。伊勢
貞丈主説よ。手を拍ふ者は。神代をり此禮ふて。人の前よ
進むふ。手を拍て進み。まと退く時も手を拍て退く。其退
る時よ拍手ある故ふ。佐加手と云。佐加を佐加理れ省語
れり。退字一。カ。ル。と。も。サ。カ。ル。ル。を。も訓む。一。と。サ。と
音相通へり。ト。ホ。ザ。カ。ル。を云も。遠退ふり。四時祭
式鎮魂祭の處よ。行酒三杯以後拍後手退出を行る是ふ
ア。今云ふれ後手れこと。式よ數所ふ見え。大神宮儀式。建
久年中行事よも見とるゞ。舊く此をレ。リ。ヘ。デ。と訓る
れ非ふり。志理閉手とも。手を後よ同して。物を云る事よて。
拍ことよも非ず。そは火遠理命段ふ云を見るべし。師も
直會を給ハりて後よ拍手ふ也。能知之手ふり。と云れ
ふ也。外よも以後ふること無て。後手とあはをむ。何

とう云む。此も決く貞丈主の言の如く。佐加理手とぞ訓べき。逆手れ逆も借字ふて。葦
原中国を。天神御子ふ讓奉ア。て。天退手を拍て。隱れ給牙
ふ由ふア。天とハ。敬ふ意よ云。言よて。神代よ例多し。伊勢物語ふ。女の男を捨
て出往々ふ事れ段ふ。住し所も知らば。彼男も。天れさう
手を拍てふむ詛ひ居る。むく故々きふを。人れ思ひハ負
ふ物ふや有手。負ゑもれふや有む。今こそは見めとぞ云
ふる。とのふれも。女よ捨らまて。爲方ふく我も退く意よふ
ア。て。後手を拍とふふア。或説よ。天逆手も。後手ふ手を拍
るふりと云るも。逆字よ付ての説れまど。逆字も。上よ云
ことふり。人を詛ふとき。如此ゑ
如く借字ふり。此ハ伊勢物語よ。さう手を拍てふむ詛ひ
を行と有よ依て。人を詛ふ時ふ。天逆手ハ拍もの れり。と
云説を作出とるふり。此物語れ天のさう手も。詛ひ詞よ

付とるよれ非び。凡て哥物語の註りハ。知まぬ事を
ぜ。本文を以て註とせること間ゐり。用ふばららび。と言
ゑ孔ゑ説ふ従ふばし。貞丈然しれ説れ。勢語臆断の別勘。ま
と其隨筆ゑどよ記されとるを。文を
約めもし。まと引直し。○八重青柴垣をれ。書紀よ。柴此ヲ云フ府璽ト見え。古
もして挙とるゑり。
事記よも。訓テ柴ヲ云フ布斯ト云ふり。中昔の今世ふも漁獵をに
哥ふれ。布斯志婆を重ねても云り。
ふよ。海ふはま河よまれ。織を樹周して垣とゑし。一方よ
口を開け。其水底ふ青柴を漬て。彼垣の開とふ處を卍。魚
等れ入て。柴中よ潜まるを伺ひて。其開ゑる處を塞ぎ。柴
を引揚て魚を捕るとばゐの卍。此を布斯都氣と云。多くれ
冬の獵よにる事ゑゆ。拾遺集平兼盛哥よ。ぬし知々し淀
のヒとりを々さ見まぜ。云くと有
まぜ。布斯都氣と云コ
も古き語ゑりゐ卍。此れ青柴垣は卽其よて。八重をれ魚

れ逃まじく。幾重も織を立周しとる由ふふゑし。然まぜ
言代主神。此埼よ柴漬を搆へ。漁獵して居給ゑるれゆ。岡部翁も師も。此を唯ふ柴もて造まる垣と見られ知るれ精らび。○打成の成れ借字よて。
天逆手を打鳴せふを。打那志と云るれ卍。其は初ふ畫成
と云よ。畫鳴と書ると。返さふゑふを思ひ合せて辨ふべ
し。拈れ琴を彈嗚を。比伎那須。笛を吹嗚を布伎那須。鼓を打嗚を宇知那須ゑど。凡て嗚を那須と云りと。師れ云
まとるを思ふべし。然まぜ此れ其乘給へふ船をバ再用ふはじき
意を示せて蹈傾け。天之退手を青柴垣の内よ打鳴ふ給
ゑふ由ゑ卍。記傳よ。この打成れ義を解て。打れ天逆手を拍ゑり。成れ蹈傾けとる船を。青柴垣よ変化ゑり。上よ湯津爪櫛取成其童女と見え。ゑれ次ふ取成立氷取成劔刃とゑるも同じ。されぜ其船を蹈傾々て。天逆

手を拍て、其船を青柴垣に成て、と云意あるを、其船をと云ことを再び云むと、詞拙くまで、上に譲りて、下我で省き、まと逆手を打と数〻く意あるを、其間に青柴垣にと云おををバ置て、青柴垣に打成と云へるを、古文の妙あるを巧ふして、後世の及むぬとびあり、と言まし信ぶのとし。

○隱坐矣に、青柴垣化内に。

隱坐を云ふ。顕宗天皇、巻の大御哥に、美夜麻賀久理氏、推古天皇、紀に、和餓於朋者弥能、訶句理摩須、阿摩能椰蘇訶礙、おどあり。

ちて此を、青柴垣に隱あ万ふと云詞あゞら。上に父大神化、八十坰手に隱りて侍ハむを詔へる如く。此、神ま於海底に入坐て。現御身ハ、永く隱れ給ふこを我含と。延喜六年の日本紀竟宴に、得事代主命、藤原佐倍乃阿遠布事加幾迩、多比為須留可那、と、高哥に、須女美万尓、夜志末乎佐利氐、奈美能宇合に、海人に寄る恋哥に、我恋を、あるの逆手を打返し、思ひときてや世をも恨みむと詠るも、此の故事を思ひてあり。

然るは大国主神、固をゆ

此、御国を、天神之御子に避奉ひ給ふべき。大義をば曉り御坐せる故に。上件の如く、我をを、ゝ治賜はゞ。吾を八十坰手に隱ひて侍むと白し給へるを、然ゝゞに御長子。言代主神に心をおを。御自化御心は定給ひ、ゝも。猶此、神に問ておそ。決き報命をバ白さ免と。稲背脛命を御使者に遣せる化り。此を神も人も同状ある。いを也止事あき眞情に有ゝひ。詔命を演て、言代主神の海に入坐しも、其埼ふての事あり。然る我古事記ハ、使者を遣せるを、建御雷命に、伝て、伊那佐之小濱へ、徴來る趣ある は、誤れる傳あり。そハ青柴垣の事をも、思ひ合せて辨ふばし、此使を、大国主神化遣し使ある故に、式に出雲郡に あは社も、大穴持伊那西波伎神社とあり。

故是を以て言代主神、我在て中

中ゐ。父大神の御心動きて。此大義を過ち給事もや有む
と。己命れ顯世よ。心を遺さぬ由を露はし。天神の命を恐
みて。此国者可立奉天神御子吾亦不違奉と。一言ゐ言離
ち。其船枻を蹈傾々て。先かく潔く隱坐る例ア。是ぞ言代
主と名ぢ負坐る由縁ゐ。日本紀纂疏よ。事代主神。欽天神之敕諫父謙讓而去可謂忠且孝也を言へ。漢意よ似と其ゑ御名れ義代ゑ。岡部
翁れ神賀詞の解ゐ。神乃禮自利ハ。他の祝詞よ禮代とあ
ゐを同じことゝて。礼代も此ゐらひて。利ゑ留志の約章夜自利と訓べし。
まるよて。禮れ志留志と云ゑをアア。紀ゐ物実を望能志呂とよゑる。即是よ
同じを言れゐる意よて。言代ハ言の信れゐ。事を書るゑ借字ゐ。ちて

音信まと信物ゐど云信字。其ゑ上件の如く。天神の命を
やゞて志留志の義れり。
違奉じと言ゐ言れ信ゐ。其船を蹈傾々て。青柴垣よ隱
坐ゑばゐゆ。後よ称ゐとる名を以て。前へも及して。云傳ふる例多々れど。此事をり前よ。此名を大国主神の言ゐ詔へることあるも。妨ゐし。ちて積羽八重とは彼青柴れ葉を彌重よ積重ゐて。柴垣を造れるゐ入給ゐを以て稱しよや。都波とも云ゑ。美の畧ゑゐり。ゐゆ第六十段。興台産靈神の下よ解とる。辞代命を云ふ名れ義をも合せ考ふべし。ちて仲哀天皇れ御世ゐ。神功皇后ゐ神憑坐て。韓を征せ奉アア給へる時よ。此神も憑坐て。於天事代於虚事代王籤入彦嚴之事代主神。と名告せゐ。於天事代於虚事代は。天よも空ゐも言の信ある由よて。此時

此謂を以て名告坐るれば為し。（れは彼御段に委く云ふを見るべし。）はと味鉏高日子根神と申はた。やがて此神あはこを上ゐ委く云はゐ如くあはゞ。（第百三段の傳見るべし。）土佐国風土記に。土左高賀茂大神。爲一言主尊。一説曰大穴六道尊子味鉏高彦根尊とあり。（師は此一説を非と云れおきど。委のらば其は土左高賀茂大神為一言主尊を云るを。祭神を云るよて。動あき傳あるを。第百段に註る如く。阿遅須伎神を。高賀茂神と申はと同じきを以て辨ふべし。）然れど一言主神を申奉も。言代主神の示名あはを。雄畧天皇は御世ゐ。御形を現して。天皇命と共に狩し給ふ時ゐ。吾者雖惡事而一言。雖善事而一言。言離之神。葛城之一言主之大神也。を詔へはゐ御名告は意を考ふはに。吾は惡事も一言ゐ言離ち。善事も一言ゐ言離ち決むる神ゐて。一言主大神と云神ぞと詔ふゐて。此も言ゐ信ゐはゐ由は御名告に。此の謂に依れるおと云ゐ更ゐ。（おの言離之三字を。師は コトサカノと訓きおれぞとろし。偖これ御形を現し給へる時は。未一言主の社は無ゐしうば。葛城社の神現を給ふるゐり。れは彼御段に委く云を見はゐべし。）ちて万葉十二に。不想乎想常云者眞鳥住卯名手乃杜之神思將御知。とを。はゐ卯名手乃杜は。言代主神は社ゐるおと。下に註ふ如くおるを。（第百二十段の傳見るべし。）かく詠はゐ歌の意は。心ゐ深く想は。ぬ人を。口ゐはみ想ふ由を云むゐは。卯名手乃杜に坐て。言代主神の御知看して御罰ゐらむ物ぞと云はりて。其は言は

信を立あ万ふ神あまぢ。言よ偽あき由を。此神よ誓ひて申せる。古へ此例りぞ有れむ。是をもて古へいさく。其御稜威を畏み。崇奉れるあと知べし。はと是よ就て按ふよ。式ある攝津国武庫郡。廣田神社の枝宮よ。西宮大神と稱ふ神あり。此を後崇光院御記よ。應永九六年六月。蒙古襲來の事を記させ給ふ條處ふ。西宮荒夷宮震動。云くれぞ在る宮ふて。今も夷宮といふ。また俗りは。夷三郎殿宮とも云べり。此宮の祭神を。或說よ蛭子命。大国主命。事代主命三座あるゞ。事代主神を主と祭れるあり。と云へり。また或書どもよを。蛭子命。事八十神。大国主神を祭るとも在り。其御像を世よ傳ふるを見ふよ。烏帽子狩衣を著て岩よ倚て。魚を釣と所狀あ

ふを。事代主神の故事よ由有て見ゆまぢ。此宮の主を祭るは。信よ言代主神あらむも知ばらば。但し惠毘須宮と云名を。蛭子の異ある狀なり。負るれふべし。世よ異ある物を。惠毘須と云由を。神武天皇卷。大御哥ふ。惠美斯袁比多理。毛く那比登とあ為処よ。委く註ふを見るべし。ちて毎年九十月二十日ふ。商人どもは家くよて。夷講とて此神を祭るハ。商を始給へる神ふふ故ふ。祭ると云ふれど。此を人よ物を賣渡ばよ。偽あき由。手戔拍て誓ふれ事バ。此の謂を思ひて。祭て來ぬるふや。京の四條京極よ。悪王子とも。冠者殿とも称ふ神あり。て。十月九日ふ。此社ふ詣るを。誓文拂やいふ。此も由有て聞ゆれど。其祭神を。素盞烏尊ありと云ふぞ由あし。さ多世よ何ま弘く大許久。恵比寿として祭る。恵比寿ハ。少毘古那神あるべく思ふ由あり。上第九十三段よ云へり。○此者坐葛城之鴨社神也。

和名抄に。大和国の郡名に。葛上。加豆良岐乃加美。葛下。加豆良木乃之毛。
とあるは是なり。此地のことは。委くは神武天皇巻に註ふを見るべし。此社は。神名式に
葛上郡に。鴨都味波八重事代主命神社二座。並名神大月次相嘗新嘗。
をあゆ。鴨と云由は。まだ姓氏録に。賀茂朝臣大神朝臣同
祖。大田々禰古命孫。大賀茂都美命。一名大賀茂足尼。奉斎賀茂神
社也と見え。此傳を師は高鴨阿治須伎託彦根神社を斎ふるなるべし。解れ故とど違へり。そは下に引
く。大三輪神鎮座記の文なれて知べし。大三輪神鎮座記に。瑞籬宮御世。崇神天皇
大田々根子命孫。大賀茂祇命。承勅立社於葛城邑賀茂地
奉斎事代主命。仍賜賀茂君氏とあり。大田々根子命のことは崇神天皇巻に委く見えたり。舊事紀にも大鴨積命。瑞籬朝御世賜賀茂君
姓とあり。此賀茂氏は建角見命の末は賀茂氏とは異な

り。思ひ混ふべからず。猶崇神天皇巻に註ふを見るべし。然れど鴨と云は。葛城邑中
なる地名にあむ有りけり。山城国の加茂は。鴨羽の矢は流来なる謂に依て名けたるを。此
地の名は。いにしへある由有しとも知ぬべからず。後に此地を。鴨と云なとは聞えぬなり。此御社の在る処を。御
所村と云なしあり。あなに諸国に。御名を稱せる社は更
ふも言はぬ。鴨と云ひ賀茂と云社の。式に載れるは多か
なる中に。決く此神の社を聞え。且さに因宜を次くに記
し出ば。大和国にも此外に。高市郡に。高市御縣坐鴨事代
主神社。大月次新嘗。○師説に。はた今高殿村と云に在て。大宮と称へ。天香山のほとりに西の方をあり。天武
天皇紀に。高市縣主許梅に著りて。吾者高市社所居名事代主神と詔へるは此神なり。清和天皇紀に。貞観元年正
月に。従一位を授奉給へり。けて此を鴨と云を思ふに。大和国なるから。葛城鴨社を移せるなりけり。摂津

国嶋下郡に。三嶋鴨神社。此社のことは。第百三十七段上に傳に。委く註ふを見べし。

野国山田郡に。賀茂神社。とは同郡に並びて。美和神社あれば。必事代主神あり。陽成天皇紀に。元慶四年五月九日。授勲十二等。従五位上。賀茂神正五位下とあり。加賀国加賀郡に。加茂神社。此も同郡に並びて三輪神社にあり。備前国赤坂郡に。鴨神社三座。また同郡に並びて。宗形神社にあり。和名抄に。同郡に葛木郷もあり。津高郡に鴨神社。こもまた並びて。宗形神社あり。兒嶋郡に。鴨神社にあり。さて上道郡に。大神郡に。神社四座。邑久郡に。美和神社にあり。また清和天皇紀に。貞観七年十月九日。讃岐国賀茂神従五位上。同十七年五月九日。授讃岐国従五位上。賀茂大神正五位下。なども見ゆ。和名抄に。同郡に鴨部郷あり。今鴨村と云に在ぞ。猶此餘にも多くあるを。其は次々に。因を追て記し出ぢし。第百二十段。第百三十一段の傳見べし。○ちて同く鴨神社。賀茂神社と云に。山城国の賀茂神社を移せりと聞ゆるも少くらべ。そは神武天皇紀に。彼神の事は出さぬ処に。委く考へ云ぢし。偖は

に神祇官坐御巫祭神八座の中に。大国主神は坐さで。此事代主神は坐こをは。師云。此八座神はうち。餘は七座いおはせども。天皇の大御身は上を。守護福幸坐神さちれるに準ずて思へば。此事代主神は。下に父大国主神の言に。八重事代主神。爲神之御尾前而仕奉者。違神者非也とあるに。此等は所以由りて。殊に天皇は御守神ぞれ形ぬ。天武天皇紀に。高市縣主許梅に著りて。吾者高市社所居名事代主神。立皇御孫命之前後。以送奉云く。且立官軍中守護之とあるを思ふべし。○今云。おは此八神の中に言代主神の坐ことは余も考へ。そは神武天皇。卷鎮魂祭に。

○鋏亂云。されの二十二ヶ巻を印本（スリハキ）と爲て。同志の人〻ふ。書寫の勞（イタヅ）き無らしめ。且普（ツヒ）く弘ん。世ふ弘めむ事を勤（ツト）むる者は。石見國那賀郡鍋石の里に世〻住める。江尾兼參。まゝ備後國御調郡三原ふ住居る。松野尚志。はゝ豐後國岡の殿人。田近長陽。これ三人にはそ。

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目　　塾藏版

○古史成文 神代部	三巻	○古史徵 神代部六冊 開題記五冊	十一巻
○古史傳 自初巻至九四巻	六袂刻成	○古史本辭經 五十音義訣	四巻
○神代系圖 折本箱入	一帖	○同 小折本	一帖
○同 挂軸料	一枚	○靈能眞柱	二巻
○神拜詞記	一帖	○玉多須喜 二帙	十巻
○太元圖說 石摺	一幅	○古道學神号 同	一幅
○万聲大紗譜	一幅	○弘仁歷運記考	二巻
○神字日文傳	二巻	○疑字篇 日文傳附錄	一巻
○皇國度制考	二巻	○祝詞正訓	二巻
○大祓詞正訓 折本	一帖	○天津祝詞考	一巻
○古道大意 講本	二巻	○靜乃石屋 同	二巻
○皇典文彙	三巻	○童蒙入學門	一巻
○入學問答 附著述書目	一巻	○牛頭天王曆神辨	一巻
○盤宗仲景考	一巻	○古今妖魅考	三巻

○鬼神新論　一卷
○悟道辨　同　二卷
○大道或問　一卷
○立言文　同　一幅
○赤懸歷代尺圖　一枚
○[redacted]
○宮比神御傳記　一卷
○神字彙　一卷
○神德畧述頌　一卷
○喪儀略　一卷
○[redacted]

○春秋命歷序考　二卷
○伊吹於呂志　同　二卷
○木匠祖神号　石揩　一幅
○武道祖神号　同　一幅
○荷田翁啓文　一卷
○[redacted]
○天満宮御傳記略　二卷
○古學二千文　同　繞例　一卷
○古道訓蒙頌　一卷
○葬事略記　一卷
○[redacted]

○出定笑語　講本　附錄　三卷
○俗神道辨　同　四卷
○德行式　同　一幅
○醫祖神号　同　一幅
○[redacted]
○日女島考　一卷
○草木撰種錄　一枚
○叶古要略　一卷
○石揩類　數種
○[redacted]

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan